

魔神王が断つ！

など～

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

敗北した人理焼却式と滅亡の一途をたどる帝国の幼い皇帝。

世界の壁を越え、彼らは出会う。それがどんな数奇な運命を呼び寄せるのか…

この小説にはFate／Grand Order第1部、1. 5部の重大なネタバレを含みます。

目次

プロローグ	1
決意、そして顕現	13
計画始動	28
趣味：殺戮↓少女のセコム又の名をロリ	47
(ry	47
人類悪とは即ち人類愛に他ならない	64
帝具VS宝具	84
両断と塵殺	102
三つ巴の予感	119
魔弾と悪鬼	130
変わりゆく世界線	158

プロローグ

(……)

永い、永い夢を見ていた気分だと感じる。

ほんの数分の出来事をまるで数時間かけて味わったような、そんな感覚におそわれる。

たった数分、されど彼、否、彼らには数千年分の価値があったと感じる。

三千年間、一つの目的を達成するために神殿で無限ともいえる調整と研鑽を行ってきた。

そして、誰にも、世界にも、あの無能な王にも気取られずに、計画は実行された。全てはうまくいっていた。あの組織が介入するまでは。

人理継続保障機関カルデア、否、人類最後のマスター・藤丸立香。

無駄だと切り捨てた。もうやめると告げた。だが、彼はあきらめなかった。全ての魔神達が困惑していた。なぜ、なぜだと…

疑問を抱えるも所詮、ただの人だと決定した。それは間違いではなかった。

7つの特異点を越えた先にある我々の神殿。そこで私達は終わりだと推測していた。たかが一人の人間とデミサーヴァント。例え、サーヴァントを数体呼んだところで、我々、72柱の圧倒的な物量差に何ができると嘲笑った。

極点の流星群を見るまでは。

それからは怒涛の展開だった。

数多の英霊が藤丸立香のもとに集い、我々と交戦した。何度も死んだ。だが、すぐに復活する。何度も殺した。だが、すぐに戻ってくる。

統括局^{グレイテニア}に第三宝具の使用許可を求めた者もいた。だが、許可は出なかった。

結果的にマスター、藤丸立香と相棒、マシユ・キリエライトは玉座にたどり着いた。

統括局は彼らと戦うことを決意した。ソロモンの姿を崩し、魔神王としての姿で彼ら

にあの光帯を使用する決断を下した。人類史三千年分の熱量を持つ光帯を。

最初の一撃に手加減などは微塵もしていなかった。わかつていたことだった。彼女、マシユ・キリエライトの盾ならば第三宝具を防ぐだろうと。彼女の命と引き換えに。

彼女によつて救われた藤丸立香に余力など無かった。そう、藤丸立香には

『訣別の時きたれり、其は世界を手放すもの』

我々が知ることのできなかつたロマン・アーキマンの宝具によつて我々は私になつた。

そして私は知る。彼がここまで戦う理由を。

『決まっている！生きるためだ!!』

彼の当たりの答えは私を納得させるには十分だった。私はそこで倒された。魔神王

そして、私は彼に最後の勝負を挑み、再び敗北したはずだった。

そこで私の記憶は途絶えている。

ふと、頭の中に声が響く。やかましい程の大勢の音が

『これはどういうことだ…統括局よ！判断を求めろ！』

『このような結末は我々の推論に存在しない！どういうことだ、何が起きている！』

『生死生死生死！死にたく…』

『フジマルリツカアアア!!!』

『ああ…ああ…キアラ…様？』

『祈りを！外なる神を!!』

『死にたくない…もつと我を…』

……なんだこれは？魔神柱なのか？確かに第一宝具にて、72体の魔神として分断され、最後はそれぞれの個を確立したと思っていたが、あまりに混沌とし過ぎている。

「鎮まれ、72柱達よ。まずは情報だ」

鶴の一声で静かに…ならなかった。以前ならば考えられないことだ。やはり彼らにも問題が生じているのだろう。

結局、全員で意見を話し合うまで一柱ずつ静かにさせなければいけなかった。一番疲れたのがゼパルだ。虚ろな眼でぶつぶつと何か言っていた。

「統括局より質問だ。お前たちの最後はあの戦いか？」

この質問に67の魔神柱が訂と答え、5の魔神柱が否と答えた。

「統括局よ。まずは現状の把握を優先すべきと立案する」

「否、我々の内部に問題が存在するか否かの調査を行うべきだ」

「…観測所、管制塔、溶鉱炉は現状の把握。視覚星、生命院、廃棄孔は我々に問題が無い
か調査しろ。兵装舎は万が一の事態に備え戦闘準備。情報室は我々に集結する情報を
共有させろ」

「了解」

全ての魔神柱が自らの持ち場に着き、行動する。いかに個として分かれても、かつて
は全能を超えし魔術式。瞬く間に作業を終わらせるだろう。

ふと玉座の上を見上げる。そこには何も無かった。あの光帯も…

同時にあの戦いは夢でも幻でもない実感する。

（あの戦いの後ならば、この時間神殿も崩壊したはずだ。だが、現にこうして存在が確立
されている）

全てが矛盾している。我々はあの戦いを記憶しており、心身共にその傷を抱えてい
る。だが、時間神殿だけは光帯以外はあの戦いの前の状態だ。

（理解が追いつかない。やはり魔神柱達の報告を待つべきか）

そんなことを考えていると、彼に感じたことの無い感覚が襲い掛かる。

「……この感覚は!!?」

訂正、正確には忘れていた感覚だった。

だが無理も無いだろう。なぜなら、三千年以上感じていない感覚なのだから。

「警告!統括局よ!我々は召よばれている!」

「馬鹿な!ありえぬ!王は無に至ったはずだ!!」

彼ら、七十二柱をよぶ人物はたった一人しかいない。彼らを生み出し、使役し、激怒させた、あの無慈悲で無情で、人間としての感情を持たなかったイスラエルの王、ソロモン。またの名をロマニ・アーキマン。

彼は、最後、あの少年に全てを託し、第一宝具の効果で無へとなったはずだ。

だが、今こうして彼らは召よばれている。

「……統括局より、全七十二柱に判断を求めろ」

「……判断材料が少なすぎる。我々に最適解は導き出せない」

「我々が死んだとしても時間神殿がある限り復活は容易だ。ここは召喚されては?」

「……そうなたら統括局一人で逝行ってくれ」

「なぜそうなるフェニクス!?!」

「死にたくないからな」

「フェニクスの意見に同意する。私も死にたくない」

「アンドラスまで!？」

「統括局ならば問題ないだろう。死んでも復活できるし、ソロモンの姿ならば余計な問題を生まずに済む。さあ、行け」

結局、うまいことまとめられてしまったゲーティアが行くことになった。

私、皇帝は幼い。だが、この帝国をまとめ上げる人間だ。私が皇帝の地位にいるのはひとえに大臣、オネストのおかげだ。彼の巧みな政治手腕によって私は皇帝となれた。今も彼の意見に間違いは無いと信頼している。

いづれ、私もオネストのような素晴らしい男になりたいものだ。あの肥満体はどうかと思うが…

今日も一日、執務を終えて寝室に入る。オネストのおかげで私はあまり仕事をしないが、罪人の判決や皇帝私のサインが必要な書類は大臣である彼にはできないことだ。

寝ていると、変な感覚に陥る。まるで夜の海に投げ出されたような感じだ。

暗く、底が見えない。だが不思議と息苦しくない。非日常のことだが、どこか自分で当たり前と納得してしまう。

「あれ？こんなところに人？」

声を掛けられ、振り向くと、そこには白髪でゆったりとした豪華な衣装を纏うハタレっぽい男性がいた。

「ハタレかあ。まあ事実だけど初対面の人に言われると、ぐさつとくるね」

あつ、申し訳ありません。まさかこの空間では心の声が出るなんて知らなくて…

「まあ、いいさ。というか、心の声にさらつと順応したね」

まあ、私の国でもとんでもないものがたくさんありますからね。帝具とか、帝具とか

…

「大変そうだけど…君も王様かい？ちよつと失礼」

彼はまじまじと私を見つめ始めた。さっきの言葉から察するに彼もどこかの国の王なのだろうか？

「……ああ、なるほどね。帝国の皇帝さんか。しかも……いや、これは言うべきじゃないね」

そう言われると気になります。

「うん、そうだよ。ただこれには…僕にはどうにもできない。もうすぐ消える僕にはね」

もうすぐ消える、ですか？

「そう。もうすぐ王の僕は消えるんだ。でも後悔はないよ」

そうなんですか。なんの後悔もなく消えることができるなんて素晴らしいことだと思えますよ。

「そうかな…：そうだ。後悔ついでに一つ引き受けてくれないか？」

えっ？何ですか藪から棒に。

「簡単に言うとな僕の分身達を引き受けてほしいんだ。彼らはすでに消滅してるけど、無くなったわけじゃない。彼らの遺体、痕跡、残り物だけでも十分危険だ。君が彼らを引き受けてくれれば、君の国の運命も変えられるかもしれない」

帝国の運命？どんな運命ですか？あと、その分身につけて危険すぎませんか？

「帝国の運命については悪いけど言えない。僕が全てを伝える時間は無いし、どうするかは君次第だ。分身達のことは一応の安全装置はかけておくけど、彼らを最高の味方にするのも最悪な敵にするのも君の行い次第だ」

……私の行い次第、ですか？

「そう。君が最後まで最高の王であり続けられるか、僕のような無能な王になるかどうかどう

かだ」

あなたが無能？まさか、僅かな言葉しか交わしていませんが、あなたは素晴らしい人だと感じますよ。

「まあね。でも彼ら曰く、王としての僕は無能だったらしい。気にしなくていいよ。彼らも丸くなっていろいろいるだろうし、僕が感じた君の信念はいい王の信念だと思うよ」

…わかりました。その話、受けさせて下さい。

「…わかった。じゃあこれを」

そういつて彼は手のひらから十の金色の指輪を取り出した。

「オリジナルじゃないけど、彼らを縛るには十分な力を持つている。何かあったらこの指輪に命じるんだ。あと、こんな事、あのロクデナシみたいで言いたくないんだけど…」

「この指輪を手にしたら最期、君は人では無くなるよ」

…：…わかりました。私の使命は良き帝国を保ち続ける事。そのためにあなたの分身、お引き受けします。

「そうか。ありがとう、幼くもよき王よ。君の未来に幸あらんことを」

ありがとうございます。いずこの王よ。そしてさようなら。

意識の浮上と共に目が覚める。まだ明朝のようで、窓からは暗い闇しか入ってこない。

あれは夢だったのか？少なくとも現実ではない。だが、空想でもない。間違はなく私のはあの人に会った。だが、それは現実では無いどこかでの出会いだろう。だって、私の手の中には彼から託された十の指輪があるのだから。

指輪をはめるか、戸惑う。我が国の帝具には適合しなかった者を問答無用に殺す帝具があると聞く。もし、この指輪が私に適合しなかったら…

いや、彼は私を信頼してくれた。ならば、私もその信頼に応えよう。

全ての指にはめた瞬間、情報が流れ込んでくる。この指輪の使い方、分身達の名前が。「ゲータア、か」

名前を知っても、彼らがどんな存在かは教えてもらえなかった。

「あとは自分で調べろということですね」

彼らは危険だ。本来なら指輪を取り、嚴重に封印すべきだ。だが、国を維持するには

時に、圧倒的な武力も必要だ。かつて始皇帝が帝具を作ったように。

「来てくれ、ゲーティア！」

強く願い、彼らを呼ぶ。そして現れたのは…あの王の姿を模したナニカだった。

「っ!!？」

あの人とはかけ離れたオーラ。一番近いものが、帝国最強に数えられるブドー大將軍の戦いを見た時だ。自分では想像もできない鍛錬の果てにたどり着く最強のオーラ、それに近い。

「…貴様は一体…」

「あなたは…一体…」

この会合から一年たたずに、帝国は大きな節目を迎える。

その後、皇帝陛下はこの日を、『運命にであった日』と呼んだ。

決意、そして顕現

「貴様は一体……」

ゲーティアの思考は困惑しかなかった。目の前には記憶全くない幼い少年。そして少年の指にある十の指輪。そしてこの少年と何らかのパスがあること。全能を謳う魔神の能力をもつてしても、目の前の事柄が全く理解できなかった。

「あなたは一体……」

そして皇帝も困惑していた。だが、夢(?)の中で彼に教わっていた分、彼の方が早く動けた。

「っ！ゲーティア……ですか？」

「……いかにも……」

「え、えつと、あなたのオリジナル？の人からあなたを託されました……」

「!?……」

皇帝の言葉に僅かに驚愕の表情を見せるもすぐさま思案顔になるゲーティア。

「その男は今の私と同じ姿だったか？」

「は、はい……」

思案顔を全く崩さないゲーティア。おどおどして自発的に言葉が出ない皇帝。

ものすごく気まずい空気が周囲を包む。数秒が何倍にも感じる様な感覚を覚えるが、それを破ったのはゲーティアだった。

「王の思想は理解できる。ならば、今は現状の把握か…その少年」

「は、はいいー！」

「()はどこだ？そしてお前は何者だ？」

漏れだす圧倒的なオーラに押しつぶされそうになるが、何とか耐えた皇帝は彼の質問に答える。

曰く、ここは帝国と呼ばれる巨大国家。

曰く、そしてこの場所は帝国の中枢、帝都の王宮。

曰く、自分はまだ幼いがこの国の皇帝であること。

次々と出る常識的な知識。だが、ゲーティアにとっては非常識この上ないものだった。

(帝国、帝具、始皇帝…私達の世界とはあまりにもかけ離れすぎている。並行世界すら超えた異世界、か)

「あ、あの〜」

「なんだ？」

「こつちの事を話したのですし、あなたの事を話してくれませんか？」

（…どうする私達の事を全て話すか？）

魔神柱達のことを話すという事はあの世界で、彼らの所業について話すことと同義である。それを話せば間違いなくこの少年は彼らを見る目が変わるだろう。

「…我々の事を話すには信頼が必要だ。今のままでは我々の事は話せない」

「ええ、そんな」

（この皇帝…人を疑わなすぎる。これで政治が出来るのか？）

「素朴な疑問なんだが、君はその年で政治が出来るのか？」

「大丈夫です！うちにはとても優秀な大臣のオネストがいますから！」

大臣の名前が出た瞬間、ゲーティアの心中ではあの世界の光景がよみがえる。

幼い血統の良い人物を立て、その人物の下に就きながらも、影からその人物を操り、思うがままに政治をする。

完全なる悪政を敷くものもいるが、中には善政を敷くためにこの手段を使う者もある。

（これは調べてみるべき課題だ。もしもこの国が腐敗していれば…）

「大臣がどうかしたか？」

「いや、何でもない。そうだ、我々にこの国や君を見る許可をくれないか？」

「帝国や余を見る許可?」

「そうだ。明日…いやもう今日だな。一日かけて私達の目で見て回りたい。そうすれば君のことも世界の事も知れる。対価として、我々の事を話そう。ああ、そうだ、我々の事は他言しないでくれ。」

「なんで?」

「どこから来たのか全く分からない奴が宮殿をうろついていると分かれば余計な問題を生む。それは君も私も望むところでは無いだろう」

「確かにそうだね。わかった!あなたの事は僕だけの秘密だね。じっくりこの国を見て回ってくれ!」

暗い寝室での誰も知らない会話。ゲーティアは魔神柱達と話をするために時間神殿へと戻り、皇帝は残り数時間の起床時刻まで僅かばかりの睡眠を楽しんだ。もつとも、あまりの興奮に全く寝付けなかったようだ。

「…以上で帝国の観測結果の報告は最後だ。」

「「……………」」

時間神殿の無限ともいえる空間の空気は非常に刺々しいものとなっていた。

埋めつくすのは憤怒、悲壮等々。このような感覚は今まで何度か感じた。

最初は恐らく、あの王のあの言葉。最後に感じたのは、あの指輪の返還の時だろう。

「…なぜだ。なぜこの世界の人間はここまで醜い!!」

魔神柱の誰かが沈黙を破ると、多くの魔神柱が続いて声をあげる。

「何なのだ!この醜い人間は!どこまで腐敗すればこのような生き方ができる!!」

「このような生き様は不認である!」

「不明なり。不可解なり。奴らは人間の悪性の具現。なぜそのような異常がまかり通る!」

「不要不要不要!」

「弾劾せよ。弾劾せよ!奴らのような存在がのさばるなど、明らかな異常事態である!」
彼らがここまで激怒するモノは、一日だけで集められた帝国及び皇帝周辺の情報。その中身はあの世界で彼らが嫌というほど見せつけられた汚点。その凝縮ともいえるモノ達だった。

幼い皇帝は大臣の操り人形であり、その大臣は悪政を敷く暗君であり、大臣に呼応するように政治の場は腐敗が蔓延する。それらを正そうとする者がいれば圧倒的な権力によつて罪人として辱められ、処分される。

冤罪による罪人は拷問の末に殺されるか、見せしめとして街中で公開処刑となる。さ

らに罪人の家族、恋人、関係者は全員、奴隷同然の扱いを受ける。

都市部では裕福な貴族や豪商の汚職だけでなく、彼らの娯楽のために辱められ、汚され、殺される人間達がいる。

悪を裁く者達は賄賂や甘い汁をすうことを条件に悪を隠蔽し、時には無実の人間を罪人に仕立て上げる。

地方の村は意味も無く徴収される高税に苦しみ、飢え死にする人間は後を絶たない。更には周辺国の領土を占領し、反抗すれば圧倒的な戦力で叩き潰す。

この異常な現状を解決しようとするのは、彼らならば当然の事だろう。人間の意味なき一生を嘆き、『憐憫』の理をもっていた彼らならば。

この悲劇を知り、それでいて『何もしない』選択肢など、彼らには存在しなかった。

「アンドロマリウスより疑問。我々はかつてと同じ行為に走ろうとしているのではないか？」

「フラウロスより同調。これではかつての焼き増しである。また我々は絶望と憎悪しか見ていない。最後の王の言葉を忘れたか」

だが、そんな彼らに異を唱える彼らがいた。不和を起こす廃棄孔の柱とあの戦いの最

期に英雄王から言葉をかけられたフラウロス。

「人間には愛と希望も存在する。それらを無視し、かつてのように全てを焼却するつもりか？」

彼らの唱える言葉に沈黙する魔神柱達。あの決戦は彼らにそれぞれ大きな衝撃を与えた。藤丸立香に対する憎悪、死に対する恐怖、生との離別、虚構からの救済、英霊への嫌悪など……

その中には自らの計画に欠落しているものもあつた。人間の物語は死と断絶の物語ではない。愛と希望の物語であると王は言つた。

彼らはそれらが見えていなかつた。そう様々な英霊達から言われた。

「……ではどのようなにして、この世界を救済するのか？何か有効な方法を提示できるか？」
「それはこれから考えるべきことだ。我々の叡智を持つてすれば、『逆行運河／創世光年』以外の救済方法を提示することも可能である」

「統括局より提案。一つ考えがある。」

「で、どうだつた？余の帝国は？」

日が落ち、あたりを闇が包んだ深夜。

一日の執務を終えた皇帝が寝室に入ると、すでにゲーティアが待っていた。

ちなみにこの寝室周辺には人払いの結界が張っており、万が一にもゲーティアの姿は見られない。

「ああ、今日一日、しっかりと見させてもらった。そしていきなりだが、我々からの質問を受けてもらう」

「!?、いきなりどうしたんだ?」

「今日一日の結果から早急にお前に問いたいことができな。逃げることは許さん。仮にも一国の王であるのならばな」

昨晩のゲーティアとは異なる雰囲気。異常な威圧感があり、皇帝は首を縦に振る以外の選択肢を除かざる得なかった。

皇帝の脳内には夢で青年が言った言葉が蘇る。

『彼らが君の頼もしい味方になるか、最悪な敵になるかは君次第だ』

今がまさにその状況であると実感する。

「…わかった。その質問、受けましょう」

「覚悟はできたか。ではこちらへ」

そういうと、皇帝はゲーティアが作り出した空間の歪みに入る。

瞬間、世界が一変する。

そこは別世界の魔術の中でも最高峰に位置する、世界を塗り替える魔術、固有結界。さらにその中でも規格外のもの。

生前のソロモン王の魔術回路を基盤とした極小宇宙のモデルケース。

冠位時間神殿ソロモン。またの名を『戴冠^アのとき^ルたれり^ス、其は^バ全て^ウを^ナ始^リめるもの』。

「ハ、ハ、ハは!?!」

「我々の神殿であり、拠点だ。ここに我々は存在している。紹介しよう、我が同胞たちを」

ゲーティアの号令と共に、神殿のあらゆる場所が蠢く。そこは無数の瞳があり、まるで気味の悪い絵画の世界に入ったようだった。

「72柱を代表し、バアルより挨拶を述べる。ようこそ皇帝陛下」

「えっ!?!ええ!?!」

突如、壁の一部から声が出る。立て続けに起こる奇々怪々な現象に、さすがの皇帝も困惑しか出てこない。

「我らはこことは異なる世界にてある王に生み出された者達。ソロモン72柱と呼ばれていたが、今は魔神柱と呼んでくれ」

「異なる世界!?! 魔神柱!?!」

「困惑するのは分かるが、ここは受け流せ。今重要なのは我々からの問だけだ。それが終わったらゆっくり説明してやる」

「わ、わかった…でも少しだけ待ってて…」

無理もない。いきなり変な空間に連れて来られたと思ったなら、謎の触手生物から声を掛けられて、挙句の果てにそれらを全て流せと言っているのだ。誰だって困惑する。

落ち着いていきます…
閑話休題

「それで、どんな質問だい?」

「うむ、まず単刀直入に聞くがお前はどの国をどう思っている」

「それはもちろん、良い国だと思うよ」

「外に出たことが無いのに…か?」

「そ、それはそうだけど、オネストも良い国だって言ってるし、革命軍や罪人はいるけど、優秀な文官や将軍たちがいるんだから、この国は良い国だと思うよ…」

「これを見てもか?」

ゲーティアが空間に映し出したのはある村。

徴収される高税により、飢えによつて骨と皮だけになった村人が映る。

「えっ？」

次に映されたのはある貴族の館。

泣き叫ぶ人々を狂喜の顔で拷問したり凌辱する貴族が映る。

「えっ？」

帝都のスラムの惨状。見知つた高官の腐敗の現場。薬物により心を壊され道具にされた女性達。無実の罪を着せられた者とその家族の悲惨な最期。

そして、皇帝が信頼してやまないオネスト大臣の汚職、工作、悪政、暗殺等々…

この国の闇の一部を見せられた皇帝。膝から崩れ落ち、地面に手をつく。

「こゝ、こんな…」

「これらはこの国の闇のほんの一部だ。望むのであればまだまだ見せるが？」

「もう、やめて…」

皇帝の心が大きな衝撃を受ける。今まで信頼してきたものは偽りのものであつた。この映像自体、嘘ではと疑つたが、ゲーティアや魔神柱の雰囲気がこれを事実と認識させる。

「貴様は王失格だ」

（その通りだ…余は皇帝失格だ。）

「だから王としてではなく、一つの存在として問う…」

「この悲劇を知って何を感じるのだ？この悲劇を正そうとは思わないのか？」

「悲しいよ。そして悔しい！余は必ず彼らを救う!!」

「そうだ！その言葉が聞きたかった！」

かつて魔術王に投げた問。人間でなかった王は魔神柱達を激怒させる返答をした。
故にあの偉業だった。あの戦いだった。

だが今は違う。

彼皇帝ソロモン王はあの男では無い。

故に彼ら魔神柱は再び問うた。

皇帝は何も考えず。自分の心に従って答えた。

彼らの悲劇を悲しんだ。憐れんだ。そして何も出来ぬ自分を責めた。そして決意した。

彼らの様な悲劇を救ってみせると。

「貴様が少しでも躊躇すれば殺していたが、その決意は本物だ。貴様こそ、今生の私我々の主に相応しい！」

数時間前、魔神柱達にゲーテアは一つの可能性を述べた。

『あの皇帝に期待してはみないか?』と。

一日中、皇帝の観察をしていたゲーテアは、皇帝の人格をおおよそ把握していた。

純粹であり、周囲藤丸立香によって悪にも善にもなりうる者。だが、少なくとも今は善き人間であること。あの自らの運命藤丸立香のように。

故に、皇帝にチャンス藤丸立香を設けた。かつての王に投げかけた問をもう一度投げた。

少しでも決断を戸惑えば皇帝を殺し、新たな救済案を決議する予定だったが、彼は決意した。あの藤丸立香のように。

ゲーテア達には力がある。

この悲劇をどんな形であれ、必ず終わらせる力が。

だが、彼らにはその責任は無い。彼らはこの世界の者ではないから。皇帝には責任がある

この悲劇を作ってしまった一端としての責任が。

だが、彼には悲劇を終わらせる力が無い。傀儡の皇帝なのだから。

この二種類の存在が相対した時、この運命は必然だった。

互いに足りないものを補い、一つの目標。この国の悲劇を無くすために、共に歩む。

『あらゆる悪に訣別を』

人理補正式はかつての王のように皇帝に使役される。

『この国の支配者達は人間の定義と』

皇帝は自らの決意を貫くために人理補正式を使役する。

『善の心すら間違えた！』

彼らの果てには何があるのか。

『もはや貴様らを守る堰は無い』

それはきつと夢物語のような良い国だろう

『これからは貴様らが悪なのだから!』

夢見る王

だが夢の様な世界を創ろうとする皇帝と、それを創ろうとした人理補正式がここにはいる。

『顕現せよ。祝福せよ。』

流れる涙を受け止め、それを拭う。

『我が名はゲーティア!』

流れる血を慈しみ、それを記憶する。

『今再び、人理補正の名を冠する者!』

悲劇を忘れず、それを無くすために

『人理補正式・魔神王、ゲーティアである!!』

魔神と皇帝は進み始めた。

計画始動

帝都、宮殿の朝は遅い。

何しろ墮落し、汚職が得意の政治家が蔓延る場所なのだ。一部の貴族を除いて、暗殺を恐れる者達は安全な宮殿から基本的に出てこない。

そんな宮殿で朝早くから働く者は宮殿の守護を司る衛兵達と一部の将軍くらいである。

だが、今朝は少しだけ違った。

普通ならば9時相当まで惰眠を貪っている者達が8時ごろの今、謁見の間に呼び集められてきた。

そこには当然、オネスト大臣の姿もあり、珍しく食べ物を持たずにやってきた。

「オネスト大臣。これは…?」

「私も先程来たところだね。陛下から使いがあったのだが」

「全く、貴様にも少しは礼儀というものがあつたのか」

「!!?」

謁見の間に入ってきたのは帝国軍最上位、ブドー大將軍。事実上、帝国最強の男であり、オネストが思い通りにできない数少ない人間である。

『武官は政治に口を出さず』を信条とし、政治に全く口を出さないが、良識派の文官たちを自分の庇護下に置き、オネストの手から守っている

「おやおやこれは珍しい。ブドー大將軍が練兵場から出てくるなど」

「陛下からお呼び出しがかかったのだ。参上するのは当然の事」

犬猿の仲とも言える二人が相對し、他の者達は巻き込まれたくないと言わんばかりに、彼らから距離を取る。

「お前たち！争いはそこまでだ！」

謁見の間の扉が開き、皇帝と白髮の青年が入って来る。

オネスト大臣もブドー大將軍も他の文官達も完全に思考停止した中で皇帝だけが一人歩み、玉座に腰を下ろす。青年は玉座の下に待機する。

青年の第一印象としては聡明な印象を受ける。だが、どこか不気味な雰囲気醸し出している。

「…陛下。この男は？」

「うむ！この男はゲーティア。余が新しく連れてきた者だ！」

「は!?いやしかし…こんなどこの馬の骨とも知れない男を…」

「うむ。大臣の意見はもつともだ。だが、この男の知識は帝国のためになる。故に、こやつを余の相談役にしようと思う！」

「「はあああ!」」

いきなりすぎる皇帝の言葉と展開に大臣だけでなく文官、將軍達が絶叫し、あのブドー大將軍さえも驚愕の表情をしている。

「ではゲーティア。挨拶を」

「うむ。紹介にあずかった、ゲーティアだ。生まれはここより遙か西の国。このたび陛下に拾われ、彼に忠誠を誓った」

ゲーティアの挨拶が終わると落ち着いた大臣や高官から質問の嵐が巻き起こる。僅かに罵倒の言葉が入っているように聞こえるのは気のせいではないだろう。

「静まれ!!」

そんな中、ブドー大將軍の大声が周囲に響く。

「私にとつて重要なのはこの男が陛下に危険を及ぼすかどうか。それとこの部屋の外に潜んでいる者達だけだ」

大將軍の直感、謁見の間の外部にいる異質な存在を感じ取り、彼らに敵意を差し向ける。

「流石だな。帝国最強の一角と陛下から太鼓判を押されるだけの事はある」

ゲーティアが指を鳴らすと部屋の外の気配が消える。

「…どういふつもりかな？」

「なに、この謁見を私の同胞たちに聞いてほしくてね。部屋の外に何人か忍ばせておいたのだ」

「ど、同胞だと…」

大臣は彼の言葉を聞き逃さなかった。

「然り、私には頼もしい同胞たちがいる。今ここでは詳しく話せないが、陛下には全てお話している」

「ほう、今の者達のことか？」

「うむ、先のことは余も把握している。故にここは許してやつてくれぬか、ブドー」

「…次からは問答無用で殲滅するぞ」

「ご忠告痛み入る」

大將軍の本気の眼光に全く臆することなく答えるゲーティア。こんなことが出来るのは帝国内でもエスデス將軍とオネスト大臣くらいだろう。

「おほん！それで陛下、本気でこの男を相談役にするおつもりですか？」

一段落ついたと思つたオネストはここぞとばかりに、皇帝に詰め寄る。

「何か問題があるか？オネスト」

「大ありでございます！このような不審な者を宮殿内に入れる事すら危険だというのに、更にはその様な立場につけるなど前代未聞でございます」

「確かにそのような前例はない。だが、彼が優秀だということはすぐにわかるぞ！」

「どういうことですか？」

「今回の謁見にはゲーティアの顔合わせともう一つ、ゲーティアからの提案があつてな」
「提案ですと？」

ゲーティアからの提案という言葉で一部の者達は首を傾げたが、オネストなどの優秀な者達は顔をしかめる。

政敵から出る法案ほど危険なものはないと、彼らは知っているのだ。

「先程、陛下からご説明のあった通り、私から提案がある。先程話した我が同胞たちの職場として新たに皇帝親衛隊の部隊を設立しようと考えたのだ」

「「……はあああ？！」」

数秒の間の後、本日二回目の絶叫が響く。

しばらくお待ちください
閑話休題

「それで、陛下のための、陛下直属の部隊を作成しよう?」

「その通りだ。將軍や兵達に負担をかけず、陛下の御意思をそのまま実行に移すことが出来る、いわば陛下の私兵だ」

「た、確かに陛下には直轄の兵士はおりませんが…」

「更には陛下の命令次第では、帝都の治安維持や罪人の処刑まで何なりとしよう」

「ぐ、ぐぬぬ…」

オネストが反対する理由は、皇帝が自らの手から逃げ出すこと。彼らとの接触によって皇帝を完全に傀儡にする前に、自らの意思で行動することを恐れているのだ。

「しかし、私達はあなたを信頼していない。あなたが異民族たちのスパイでないと証明できませんかな?」

「ふむ、それは難しいな」

しかし、このオネスト大臣は帝国随一の政治手腕を持つ人間である。そう簡単に引き下がないし、巧みに敵の弱点を突いてくる。

「ではここで一つ余興をお見せしよう。それを見ればあなた方の思考も変わるでしょう」

「ほう…余興ですか…」

(何を考えているんだこの男は…)

信頼を得るために余興をするなど正気の沙汰では無い。そう周囲が考えている中、ゲーティアは部屋に大量の書類を運ばせてきた。

「どうぞ皆さま、この書類を。陛下や大將軍殿もぜひ」

用意された書類を部屋にいる全員に配る。

書類に書かれていたのは『ある貴族に関わる報告書』である。

内容を簡潔に述べるなら、その貴族は脱税や賄賂といった汚職行為を働いており、さらには家族ぐるみで奴隷と称して地方からの人間を買い、弄んでいるというものだった。

そして報告書には汚職の完璧な証拠に暴行等の証言等々、ほぼ全てが記載されていた。

オネストをもってして、完璧と言わざる得ない報告書となっている。

「なるほど……で？」

「で、とは？などと聞くのは野暮だろうな。余興とは我々を取り入れる利点を皆様方に紹介することだ」

「ほうほう、成程、確かに報告書としては素晴らしい出来だ。なんなら、新しい文官として雇ってあげましょうか？」

「いや結構。その報告書は未だ第一段階。これよりその貴族の摘発に出しましょう」

「ほお…令状や手続きなしに、ですか？」

「その為の皇帝陛下直属の親衛隊だ。さあ、陛下。ご命令を」

ゲーティアが言い出したことはまさに異常という他ない。

帝国ではいくらか地位のある者達は、ある程度の保障を受けられる。それは時に大臣の傘下に加わることであったり、ブトー大將軍の庇護下に加わる等々、様々な形であるがこれによって彼らは一定の安全と特権を得られる。

故に、彼らの屋敷には護衛が配置され、屋敷外でもある程度の特権が認められている。それらが暴走した結果、貴族の屋敷では異常な拷問や犯罪が蔓延っており、それらは大きな力で隠蔽され表に出ることは無い。

それらを摘発し処分するには誰であれ一定の手続きが必要となる。あのオネストでさえ書類なしには何もできない。最も、書類の捏造が容易だからこそ、オネストが政治を支配し続けていられるのだが…

「…ゲーティアよ、一つ質問だ」

「何なりと」

「この証言者の証言は信頼できるか？」

「はい。証言者は件の屋敷から逃げ出した者であり、我々が証言を取り、現在は保護しております」

「ふむ…」

いつになく一人で考え込む皇帝に一部の者達は信じられないものを見る目になっていた。今までの皇帝ならばすぐにでもオネスト大臣に助言を求めはすなのに。

そんな状況を危険と考えたオネストは半ば無理矢理、話に入る。

「よろしいですか、陛下」

「うむ。許す」

「はっ、この証言を取ったのは彼らであります。残念ながらそれでは証拠能力がありません」

「そうなのか、オネスト」

「はい。万が一ではありませんが彼らが貴族の暴行事件を捏造している可能性があります故」

「そうか…この証人からもう一度証言は取れるか？」

「いえ、この者は精神に深い傷を負っており、医師から絶対安静の結果が下っています。しかしながら、汚職の証拠に関しては全く疑いようが無いかと」

「確かに…」

「そう、ゲーティアの言った通り、汚職に関しては疑いようの無い証拠が記載されている。」

「…では命令を下す。ゲーティアよ、同胞たちに命じ、この貴族や使用人、護衛まで全員を拘束連行せよ！」

「ほう、拘束連行。処分しないので？」

「これでは暴行事件の真偽がわからぬままだ。連行し、取り調べの後、真偽をはつきりさせよ！」

「了解いたしました。直ちに」

「すぐさまゲーティアは部屋の外へと出ていき、数秒で戻ってくる。」

「おや、もう終わったので？」

「然り、すでに我が同胞が屋敷へと向かった。さらに時間ぴったりのようだな」

「時間とは？」

「陛下からお話頂こう」

「うむ、皆の衆。朝早くで朝食もまだであろう。どうやら朝食ができたようだ。余が許す。この場で朝食としようぞ！」

皇帝の声と同時に謁見の間に豪勢な朝食の数々が入って来る。

「よ、良いのですか？謁見の間をこのような事に」

「問題ない。余が許そう。それにこれもゲーティアの余興の一つよ」

「ほう…」

オネストと皇帝の会話の後、謁見の間は重苦しい雰囲気から一変し、明るい食卓の場となった。

だが、彼らは知らなかった。

この場がもの…の数分で崩壊することを…

帝都に存在する貴族の豪邸。

帝都の特別地に作られたこの豪邸には庶民にはとても手が出せない値段で作られており、それはこのこの住民の資産と権力を物語っている。

「ふわ〜暇だな…」

その豪邸の門番である兵士がいた。彼はこの貴族の護衛として軍より派遣された人間である。

当初はここの貴族の異常性に苦悩する日々が続いていたが、次第に慣れ、今では屋敷から悲鳴や絶叫が聞こえたとしても無関心で仕事を続けられるまでになった。

仕事といつても基本的には門番であり、時々屋敷の主人達が街に行く際の護衛として付き添うくらいである。

しかし、最近になってナイトレイドという賊の活動が活発になってきており、巻き添えをくらう前に転勤でもしようかなとふけていた時だった。

「失礼。○○殿の御屋敷はこちらかな？」

突然、声を掛けられる。意識を向けるとそこにはシルクハットをかぶり、ぼさぼさの長髪をもつ男性が立っていた。

○○とは兵士が護衛を任されている屋敷の主人の名前だ。

「はい。ここは○○様の屋敷ですが……」

「そうか、ありがとう……始めろ」

男の声とともに、後ろにいた者達が一斉に動き出す。

戸惑いにより兵士の動きが一瞬止まるも、すぐさま動き出す。

「き、貴様ら止まれ！何のつもりだ！」

「それを答える時間すら今は惜しい。そして貴様も関係者として来て貰うぞ。抵抗は認めん」

「な、何を言っている!？」

兵士はただただ困惑するばかりだった。だが、このままこの男について行けば自分には良くないことが起こるといふ予感が兵士にはあつた。

「時間切れだ。陛下の命により貴様を拘束連行する」

突如、兵士がまるで糸の切れた操り人形のように倒れる。そしてそれをたやすく持ち上げるシルクハットの男。

「首尾は？」

「問題ない。予測通り抵抗したが、全て眠らせた」

「よし、すぐさま監獄へ運ぶぞ」

担いだ者達を一つの馬車に押し込め、馬車は疾風の如く駆けていった。

何人かの男達を残して……

謁見の間では朝食会が開かれていた。

ゲーティアはその中でも浮いており、今のところ皇帝の傍から離れずに終始、あたりを見渡している。ちなみに片手には料理を盛った皿を持っており、それをつまみながらである。

（何を考えているんでしようね〜）

かく言うオネストも皿に山のような朝食を盛り、モシヤモシヤと食べている。そこで誰も手をつけていない皿には手をつけていないことから、彼の用心深さをうかがわせる。

（全く、食事の量が心なしかいつもより多い気がします。はあ…また太ってしまった）

少なくとも真つ当な人間ならば朝っぱらから大皿大盛りの朝食は食べないだろう。胃もたれ待ったなしである。

コンコン

突如、謁見の間にノック音が響く。

「入れ」

「失礼します。皇帝陛下にご報告が」

入ってきたのはシルクハットをかぶり、長髪な一人の男だった。

「うむ、許す」

「はっ。先程仰せつかった一件。全て完了致しました。件の貴族は汚職と暴行の罪を認め、その関係者すべての罪の立証に成功致しました」

「うむ！〜苦勞！」

この時の謁見の間にいた者たちは皆、同じ気持ちを抱いた。

(早すぎるぞ!??)

帝国の闇で動く暗殺部隊や大臣お抱えの羅刹四鬼ならば同じ時間で事を済ますことは可能である。

だが、あくまで暗殺のみの話なのである。

最強の刺客を無防備な対象に送り込めば、瞬きの間に始末できる。その後の後始末は適当に警備隊に放り投げてやればいい。

だが、ゲーティアの同胞たちは、例の貴族を拘束し、さらに拷問か尋問かは不明だが、情報を吐かせたことになる。

それにかかった時間は僅か数分。いかに権力を持つ大臣でも同じ時間で同等の成果を挙げることはできない。

もつと言えば、貴族の護衛による妨害もあつたはずだ。

「陛下、あとは陛下の裁定のみでございます。あの罪人に然るべき罰を」

「うむ、そうだな…大臣!ここはどのような罰がよいかな?」

「は、はっ!やはり処刑がもつとも適切かと…」

「ではそのようにいたせ!」

「かしこまりました」

流れるように貴族の処刑が決まり、ゲーティアの同胞らしき男が部屋から出て行く。

「いかがかな？我々の優秀さがはつきりしただろう」

ゲーティアの言葉によつてほぼ全ての高官たちの思いは一つになった。

この存在を野放しにはできない、と

「た、確かに、ゲーティア殿の手腕は素晴らしい。ぜひこれからも帝国のために力を貸していただければと……」

「一つ訂正をしておこう。私が忠誠を誓うのは陛下のみだ。陛下の頼みならば何なりと実行しよう」

一人の高官の発言に対し、多少の威圧をこめて返答するゲーティア。

その発言に誰一人、何も反論せずにただ沈黙する。

「では私はこれで失礼しよう。陛下、後々書類などをお届けにあがります」
「うむ。この部屋で待つておるぞ」

その会話を最後にゲーティアは謁見の間を後にした。

その数十分後に山のような書類を持って帰ってきたせいで、皇帝の執務時間がいつも

の倍になったのは余談である。

「全ては計画通りだな」

「ああ。まさかこんなふうまくいくなんて…」

時と場所は移り、ここは皇帝の自室である。

「時間だ。では行くぞ」

ゲーティアの声とともに空間に亀裂がはしり、世界が変わる。

冠位時間神殿である。

「アモンより報告。我々、観覚星の予測通りに我々の存在の誇示は成功した」

「フォルネウスより報告。帝国の観測結果が出た。情報室と検討し、粛清対象リストを

作成中。今夜中には完成する」

「フラウロスより補足。リスト外にも対象者が存在する可能性が発生している。続けて

観測を続行する」

「バルバトスより報告。粛清のメンバーは既に選定済みである。明日より行動を開始す

る許可をもらいたい」

「統括局より了承。皇帝陛下より許可をいただく」

「皇帝の名の下に宣言する。『現世理想／創成国家』を開始せよ！」

『現世理想／創成国家』

かつての魔神柱たちの計画を改良、推敲した結果出された計画

人類史を醜悪な毒物とするならば、『逆行運河／創世光年』は毒物が生み出されないように過去を改変する行為である。これは確かに毒物を生み出さないが、毒物から生み出された薬や物質も存在しなくなることを意味する。

対して『現世理想／創成国家』は毒物のろ過と処分である。これでは完全に毒物を処理し切れないだろう。だが、完全に無くさずとも良い。魔神柱たち人理補正式は極限まで毒を絶つ。僅かな毒に対する処置も考えてある。

人類は必ず悪性を持つている。それを無くせば人類は終わってしまう。

ではどうするか？

王だ。

悪を悪と断じる王を。民を想う善き王を。人間の心を持つ王を。人と王という矛盾を抱えて生きれる王を。

矛盾している？ 愚かな理想？

否、それを成すために人理補正（彼）式（ら）がある。

矛盾に極限まで迫りながらも、決して矛盾しない解を導き出すために。

かつての失敗を糧に魔神と皇帝は現世に理想郷を作らんとする

理想国家の幕開けはそう遠くない。

趣味：殺戮↓少女のセコム又の名をロリ（ry

親衛隊設立より早くも三日経とうとしていた。

突然だが、三日あれば何ができるだろうか？

三日：つまり72時間だが、睡眠や食事などの生活に必要な行為に時間をさく
とすると、意外と時間が無い。

不眠不休、食事無しのブラックな職場なら72時間ぶっ続けで仕事ができる。だが、
疲れると仕事の精度が落ちて、結果的に効率が悪くなるのがオチである。

なぜこんな話をしているのかというと：

「今日で何件目ですか？」

「今日で14件目です。この後もう一件行く予定らしく、それで15件目になりますね
…」

宮殿の一室。とある二人の高官が話をしていた。

彼らは大臣派と呼ばれる派閥に所属しており、文字通り大臣に媚を売り、私腹を肥や

している連中である。

彼らの最近の話題は、ゲーティアと呼ばれる男と彼が設立した『皇帝直属親衛隊』である。

彼らは設立後、すぐにありとあらゆる貴族、高官を摘発し、処刑あるいは監獄に収容した。そのスピードは凄まじく、不眠不休で動いている。

しかも、正規の手続きに則っているために、表立って批判できないのが一層、大臣派の不安を煽っている。

「大臣殿ではありませんが…」

「ええ、ストレスで太りそうですね……」

彼らに魔の手が迫るのもそう遠くないだろう。

「で、結果は？」

「はっ、出撃した暗部の半数が撤退し、残りは現在も行方不明です。おそらく、もう…」

「はあ〜」

所変わり、ここはオネスト大臣の自室。

現在、彼は極秘裏に暗部の者から報告を受けている。

昨日、絶対に足がつかないように、人伝いに金で暗殺者を雇い、ある一団に仕向けさせた。

言うまでもなく、親衛隊に向けてである。

だが、結果は酷いもの。

良くて暗殺、少なくともなんらかの情報を手に入れようとしたが、わかったことは、『親衛隊は強い』『全員がそれなりに顔立ちが良い』くらいである。

「もういいですよ。その報酬を持って下がちなさい」

「はっ」

暗部の人間が立ち去った後、一人物思いにふける大臣。

(これは手強いですねえ……なんとか彼らを手懐ける方法を探らねば……)

未だ、皇帝陛下が言うことを聞いてくれる内に、ゲーティアを服従させるか、始末する方法をみつけなければ、と考えていた。

その時だった。

ドゴオオン!!?

轟音が宮殿に響いた

「何事だ！」

帝国最強の一人、ブドー大將軍が近衛兵を連れながら宮殿に來た。ブドー大將軍は宮殿警護を主としており、宮殿で暴れれば即刻ブドーの帝具による肅正が待っている。

「た、助けてくれ…」

「き、貴様！なんのつもりだ！」

爆音が発せられた場所に來てみれば、大臣派の貴族達が重症を負い、それらを見下す女性^{女性}がいた。

女性^{女性}は黒を基調としたドレスを身に纏い、長い銀髪をたなびかせながら、とても似つかわしくない怒気を発している。

「貴様、ここを宮殿と知つての狼藉か。女とは言え容赦せんで、親衛隊」

「…関係ない」

「なに!?!」

「ここでこいつらを始末する。それが私の命題であり、彼女たちへの鎮魂であり、救いとなる」

「貴様の命題だろうが何だろうが関係ない。ここは陛下の宮殿で、貴様はそこで暴れる者。今はそれだけで十分だ」

ブドーはすぐさま帝具『アドラメレク』を構える。しかし、女性はそのようなことは関係ないと言わんばかりに、眼下の貴族を見ている。その眼は異常なまでに赤かった。

ブドーが帝具で突撃しようとし、飛び出す瞬間…

「グラシヤ||ラポラスに命ずる！『今すぐ！神殿に戻れ！』」

「なっ！待て！私はまだ…」

突如、部屋に皇帝が入るやいなや、命令を下し、グラシヤ||ラポラス 女性を無理矢理、時間神殿に帰還させた。側からみたら女性が突如消えた様に見える。

どうやら皇帝もかなり急いで来たようでゼエゼエと息を切らしている。

「陛下！大丈夫でございますか？あの女は!？」

「はあはあ……だ、大丈夫だ、ブドー…後はゲーティアが始末をつける」

「そうでございますか…了解いたしました。この場の後始末は我々が」

「うむ、すまん…」

かくして、この騒動は終わりを見せたが、その後、襲われた貴族と大臣が介入してきたのは想像に難くない。

「ダンタリオンより報告。グラシャⅡラボラスに精神干渉および外部操作の痕跡なし。その他の不具合も確認されない」

「グラシャⅡラボラスより憤怒。先の行動は全て私の独断であり、後悔はない。今すぐにもあの害獣供を殺戮すべきである」

「パイモンより反論。あの者たちの処分は小さくない政治的混乱を招く。下手をすれば我々の計画が破却する可能性すらある。今回の騒動によつて我々の計画達成が延期となる可能性が極めて高いのだ。恥を知れ、グラシャⅡラボラス」

「ラウムより庇護。グラシャⅡラボラスの意見は個人的に同調できる。彼の憤怒は正当なものであり、卑下されるものではない」

「統括局より判決。グラシャⅡラボラスはしばらく任を解く。外部の世界を見て美しきものにふれてくるがいい」

「で、現状は？」

「グラシャⅡラボラスは拘束解除してやった。万が一のために廃棄孔を中心とした部隊が組まれている。そしてやはり、件の貴族が訴訟を起こした。いずれ大臣が便乗してく

るだろう」

「やっぱりね…：そういうえばグラシヤ||ラボラスはなぜ宮殿であんなことを？」

「本人曰く、『少女たちを助けるのに理由などいらん』らしい」

「ん？『少女たち』って？」

「件の貴族だが、自らの地位を使って年端もいかぬ少女たちを陵辱しているという情報が入っている」

「…：なあ、ゲーティア「駄目だ」まだ何も言っていないのに!？」

「おおよそわかる。『その少女たちを救いたい』だろ？それには計画の大規模な変更が必要だ。我々はその貴族が失脚した際の政治的影響と奴らの悪行を天秤にかけ、影響が少なく、異常な行為をする者達から肅清している。件の貴族の失脚は不穏分子介入の可能性となる。そもそも当初の計画ならばひと月で全ての腐敗原因を除去し、その後改革に乗り出そうとしていたのだ。我々の理想国家のためにはお前の独裁制皇帝を利用したスムーズな改革が必要不可欠なのだ。そのために私が直々に帝王学を教えることでお前を十分な王の器にし、なおかつ、大臣や将軍、高官どもへの慎重な処置をしている。一つ間違えば現在の政治体系が崩れ、理想国家は幻想へと消えるのだぞ」

「わかつているけど…：そうだ！以前ゲーティアがやったように無理矢理肅清すればいいんじゃないか？」

「人間きが悪いな。以前とはあの余興のことだろう？捕まっていた者の脱出を手引きして、証拠の書類をきちんと盗^押取^{した}ただけだ。あの時は時間が無かったからな。多少手荒にさせてもらったが、今回は違う。魔神柱^{我々}の過度な介入はこの世界の異常変革を意味する。そうなれば再び我々の計画は破綻するやもしれん。魔神柱^{我々}はある程度介入を抑制し、なおかつ、この事案の早期解決を目指す。そのためには一か月が必要なのだ」

ゲーティアの意見をまとめると、魔神柱たちの世界の技術がこの世界に広まれば、この世界の技術は過度な発展を遂げる。そうなれば魔神柱たちの予測外の問題が発生しないとも限らない。あの戦いを経験した彼らだからこそ、例えば別世界であろうと『人間の可能性』を無視できないのだ。

「…やっぱり、粛清のスピードを上げるしかないか」

「そうだな。幸い、我々も慣れてきた。今夜、残っていた一件を片付けよう。明日からは一日に6件は行けそうだ」

「流石。被害者のケアの状況は？」

「ほぼ全員の身体的損傷は回復した。後は精神的損傷だけだが、こればかりは本人次第だ」

「そっか…望むものがあればすぐに手配させよう。そのまま続けてくれ」
ゲーティア達の粛清活動は、三段階に分けられる。

第一段階、肅清対象の悪行の証拠収集と皇帝の肅清許可。これは観測所の成果によりほぼクリアされている。

第二段階、対象の身柄拘束もしくは排除。中には護衛をけしかけてくる連中もいるが、魔神柱たちには大して意味をなさない。

第三段階、後始末。暴行被害者の保護や汚職の証拠収集などである。これが最も時間がかかるのだ。

被害者の中には心に深い傷を負った者や半死半生の者もいる。彼らの治療には時間がかかりすぎる。かと言って手を抜くのは論外である。

その結果が一日に5件という、(魔神柱からしたら)遅いペースの肅清である。

私の名前はグラシャⅡラボラス。ソロモン72柱、序列25位の魔神柱である。

今、私は帝都をぶらぶらしている。だが、決してさぼっているわけではない。

元はといえば、宮殿にて偶然、あの害獣達の話聞いてしまったのが原因だ。

『最近入ってきた奴ですがね、最初は泣き叫んでたんですが、もうすっかり従順になりましてね』

『あの少女か。全く淫らな女ですな。幼いのには根は淫乱でしたか』

『ギヤハハハハ』

会話の内容ですぐさまこの害獣が少女を害し、全く罪悪感を覚えていないことがわかった。

すぐさま私は焼却式を放った。人間に模していたため、出力は落ちたが害獣に重傷を負わせる程度にはなった。

他の魔神柱たちならばここまでではしなかつただろう。だが、私には我慢ならなかつた。

あの世界で私かなぜ踏み込んだのかわからなかつた特異点。

だが、個を得た今ならば理解できる。

彼女達、魔法少女達には私は同情していたのだ。願わくば彼女たちの力になりたいと。

自らの自意識と力を削りながらも、私はあの少女、ナーサリー・ライムの使い魔となつた。

その後、彼女が、ナーサリー魔法少女が、彼女達がどうなつたかは知らない。だが、時間神殿に現れた二人の魔法少女を見るに悪い結末では無かつたのだろう。

この世界に魔法少女はいない。だが、それがどうした。目の前で泣き叫ぶ少女たちを救わない理由は無い。

「ゲイティア」
我々の計画など関係ない。これは私の意思だ。私の、最後まであの少女に付き添えな
かった使い魔の行動だ。

贖罪などと言うつもりはない。私は必ず、彼女達を救済する。

「美しきものか……星の獣でもあるまいし、この憤怒は収まりなどしないがな」

帝都の広場。そのベンチにグラシャ・ラボラスはいた。

彼（彼女？）の姿はナーサリー・ライムの成長した姿と言っても良い。

流石に子供の体では不便が多かったので大人の身長にしたが、胸も腰も控えめであ
る。

現在の時刻は昼過ぎであるが、子供の姿はあまり見えない。

現在の帝都は治安が良いとは言えない。

スラム街では窃盗や詐欺など日常茶飯事。帝都警備隊がパトロールしているが、奥
まった場所までは手が回らない。最も、警備隊の内部にも問題があるのだが。

そんな中、子供を自由にさせればどうなるか。下手すれば誘拐。最悪、無残な死体が
ゴミ捨て場に転がっているだろう。

故に、中心街の極一部の場所では子供を遊ばせない。そんな親が出るのは仕方が無
い事だろう。

（幼子が自由に遊べぬ時代とはな…）

グラシャールボラスは先の貴族達のことを忘れたわけではない。だが、ここで駆除に動けば、すぐさま他の魔神柱たちによって時間神殿に連れ戻される。

ならば今は耐えるしかない。

奥底で燃え滾る怒りを抑えながら、グラシャールボラスは彼女たちを救う計画を考へる。

（我々の計画の欠陥は全ての救済までに時間がかかることだ。彼女達は今を、一秒を苦しんでいるのだ。すぐさまの救済を必要としている。だが、私には代案が無い）

ベンチから立ち上がり、豪華な商店街に足を向ける。

「よお、姉ちゃん。俺らとイイ事しない？」

絡まれた。少し考えれば分かる事である。

超絶可愛い美少女であるナーサリーの成長版なのだから、周りからしたら最高の美女である。絡まれない方がおかしい。

「姉ちゃん、聞いてんのか？」

「黙っている（c v : 杉田）」

「!?」

余談だが、通常のグラシャⅡラボラスの声はナーサリーボイス（c v：野中）である。ただイラついてたりすると元の魔神柱ボイス（c v：杉田）に戻るのである。

「お、おお……だいぶ渋い声だな……まあ別にいいか。ささ、行こうぜ、姉ちゃん」

グラシャⅡラボラスは知らないが、このチンピラ達はこの周囲を縄張りとする組織の人間であり、地方から来た人間を売買している。

故に周囲にいる人々は恐ろしくて彼らに関わろうとしない。

「……最後通告だ。失せろ」

「……仕方ねえな。やるぞ」

すぐさま、周りを取り囲んでいたチンピラ達が女性に襲い掛かる。

だが、彼女は魔神柱が人間に変化した存在である。純粋なステータスもそこらのチンピラの数倍である。

加えて、現在のグラシャⅡラボラスは不機嫌極まりない。手加減など微塵もあるはずがない。

「ご協力感謝します！」

「いや、別に大したことは無い」

結果、グラシヤールボラスはチンピラ全員を半死半生にし、騒ぎを聞いて駆け付けた警備隊に全員引き渡された。

このおかげで、謎の美女は表では突如舞い降りたステゴロ天使、裏では組織に喧嘩を売った馬鹿な女として認知されたのは、完全な余談である。

「おすすめを一つ」

「はい。少々お待ちください」

所変わって、ある喫茶店にグラシヤールボラスは来ていた。

魔神柱である彼には食事は必要ないが、気分である。仕方ない。

しばらくすると、おすすめであるパンケーキが運ばれて来た。どこか既視感があるのは気のせいだろう。監視をしている魔神柱の一つが消滅したが気のせいだろう。

「…悪くないな。食事は我々には不要なれど、娯楽は良い。もしや我々にはこれが足りなかったのやもしれぬ」

（あつ、これはこれは。今月の分でございます）

「うん？」

店の奥からぼそぼそと声が聞こえる。通常の人間の聴力では聞き取れないが、魔神柱での聴力では聞き取れる。

気になり、遠視と併用して聞き耳を立てる。

そこには小袋を渡す店の店主とそれを受け取る男。受け取っている男の服装には見覚えがある。帝都警備隊の制服である。

『いや、毎度毎度すまんね。ちゃんと隊長に渡しとくよ』

『いえいえ、こちらこそ。あんたらのおかげで色々とやりやすくね。それはそうと、さつき店に入ってきた女、例の女かい？』

『多分な。気を付けな。多分明日には無残な死体か慰み物だろうぜ』

『おつかないですな』

(……吐き気がするな)

早々にパンケーキを平らげ、代金を払うと店を出る。

ちなみに代金は肅清した貴族の財産の極一部を摂取したものである。

「はあ……全く度し難い」

今日だけで改めて突き付けられた帝国の実態。

一度観測し、今は許容したとは言え、こうも身近に感じると再び憤怒が湧き上がる。いずれ矯正するものであっても今、存在しているという事実が許せない。

だが、全てを無かつた事にはしない。全能を誇るゲーティア我々ですら全てを無きものに

し、尚且つ美しいもののみを救う手段が無い。光があるところに影が必ずできるように、人間の悪性と善性は表裏一体。どちらか片方だけなど人間と呼べない。

故に、我々は妥協し、皇帝を主軸とした独裁国家を創造し、最良の王と魔神柱^{我々}によって民を管理し、統制する理想国家を創り出そうとしている。

だが、グラシャ^私ラボラスはこの過程に納得できなかった。だが答えが間違っているとは思わない。

過程を変え、答えを変えない方法があるのか？その問いに私は大いに苦しむ。

「そちらは？」

「グシオンより標的の一人の死体を発見。胴体を輪切りにされていた」

「ブエルより報告。こちらには娘の死体があった。刃物で斬られた痕跡があり、まだ死体は熱を持っている。同時に倉庫内に多数の拷問被害者発見。中には死して時間が経っていない者もあり、救護を望む」

「了解。生命院所属ビフロンズが向かう。ブエルには応急処置を頼む。最悪の場合は死の安らぎを彼らに」

「フォラスより報告。警備員の死体から呪殺の痕跡発見。帝具『一斬必殺村雨』の仕業によるものだ。よって下手人はナイトレイドである」

「マルコシアスより報告。標的と行動を共にした少年が見つからない。寝室には痕跡が残っているが行方不明。ナイトレイドに連れ去られた可能性がある」

「現場隊長バルバトスより結論。この一件はナイトレイドの仕業と断定。ビフロンスとブエルには被害者の処置を頼む。観測所一同はナイトレイドのアジト特定を求める。少年の安否が確認され次第、彼については判断しよう。ナイトレイドについては情報室と協議されたし」

「アモンより了解と報告。グラシャールボラスが帰還し、我々の計画について推敲を求めている。より多くの同胞の参加を希望する。至急、時間神殿に帰還せよ」

人類悪とは即ち人類愛に他ならない

時間神殿にて

この場には現在、72柱の魔神柱、ゲートイアそして帝国皇帝の姿があった。彼らがこうして一堂に会したのはこの世界に來た当日の深夜以来である。

「グラシヤ＝ラボラスよりここにいる全ての同胞に感謝を送る。早速だが、今回の議題は我々の現計画の推敲と今後の活動について決めたい」

「アガレスより質問。現計画には何か不足している要素が存在するのか？それは致命的なものであるのか？」

「バラムより否定。現計画『現世理想／創成国家』には我ら全員の賛同を受けていた。推敲の余地は無くこのまま計画を進行すべきだ」

「パイモンより同調。現計画も未だ第一段階。この国の救済は一刻を争っているのだ」

「オセより反論。現段階でも僅かではあるが計画の相違が存在する。ナイトレイドなる暗殺集団の活躍は特筆すべきものだ」

「グラシヤ＝ラボラスより抗議。私の論点はそこではない。この計画には重大な欠陥が存在する」

「ボデイスより提示。それは一ヶ月間の被害者の無念であろう。それは致し方ない犠牲と決着したはずだ。彼ら全てを救う方法はない。ならばせめてもの安寧の為、早期に決着すべしと決議されたのを忘れたか」

「グラシャーラボラスより再度抗議。当時の私と今の私の意見は違う。彼らを救うためには今すぐの救済が必要である。だが、私にはその妙案が存在しない。これに同胞達の力を貸して欲しい」

グラシャーラボラスの突然の抗議と懇願。魔神柱達は大きく分けて二つの派閥に分かれた。

一つは現在の計画をそのまま進めようとする派閥。被害者の無念を仕方ないものとして、一刻の計画成就を願う者達。主にバアル、フェニクス等が所属している。

もう一つがグラシャーラボラスの様に被害者の即時救済を望み、計画修正を考える派閥。主にフラウロス、ラウムが所属している。

真つ二つに分かれた魔神柱達を前に中立を守る者が二人。ゲートティアと皇帝である。

「お前はどの様に考える。小を切り捨て大を救うか、小を守る為に大を犠牲にするか」

「王としてなら前者だよね。でも個人的には小も守つてあげたいんだ」

「成る程、お前らしい。だがそれは空想である事は承知の筈。いかにして現実とするのか。何か策があるのか？」

「無(い)よ」

即答する皇帝。

「余は全能じゃないからな。そんな都合のいい意見なんて持っていないよ」

自らの至らなさをしっかりと理解する皇帝。単純だがこれを成せる人間はそういない。ましてや、その人の立場が高くなるにつれ、くだらないプライドが自らを奢らせていくものである。

「そうだな。貴様は平凡だ。皇帝の家という家柄こそ特別だが、お前自身は平凡なのだ。神の血を引くわけでも、異常な愛国心を持つわけでも、生まれながらの王でもない」

(藤丸立花の様にな…)

皇帝と藤丸立花はどこか似通っている。どちらも家柄とレイシフト適正生まれた時からあつた特別の為に数奇な運命を辿り、その他はどこまでも平凡。だが、必ず大きな事を成す、否、成さなければならぬ人間。

「統括局より論争の一時休止を命じる。各々、冷静に論議せよ」

「バアルより了承。しかし統括局よ。双方を納得させる意見を出すには時間が足りない。だがこのままでは今後の活動に支障をきたすだろう」

「アロケルより提案。我々、魔神柱の思考回路では最適解を出せないのならば、我々の世

界から英霊を呼び出し、意見を仰いではどうか」

「クロケルより反対。英霊の存在は我々の計画を大きく阻害する可能性も秘めている。例えあのマスター藤丸立花がいなくとも奴らの存在は危険極まりない。それに聖杯を作成する時間も我々には惜しい」

「アガレスより結論。我々の計画を漏らさず、新たに意見を仰げる人間など存在しな……訂正、一人いた」

瞬間、アガレスの言葉を理解した魔神柱72体が玉座を見る。3×72の視線に晒されたのは、この神殿にただ一人いる人間、皇帝陛下である。

「そこで余なのか？先程、ゲーティアに意見は無いと話したであろう」

「だが事実、この中で最も視点が違うのは陛下である。何でも良いのだ。我々には無い発想を望んでいる」

「ええ〜つと…つまり、多くの人を救いたいけど、その時間や計画が無いって事だろうか？う〜ん…人手を増やすとか…どう？」

「現地での協力者か…しかし、我々との接触は不安要素を生み出す可能性がある、諸刃の剣だ」

「待て、フォルネウスより意見がある。接触する人物を絞り、接触後の行動予測が容易な者を手駒とすれば良いのでは無いか？」

「フラウロスより抗議。人間の力は侮り難い。あの特異点での藤丸立花の行動と時間神殿の戦いを忘れたか」

「フォルネウスより否定。忘れているのはお前だ、フラウロス。決戦前のお前ならば人間を軽んじていただろうに。接触すべき人間は我々が現段階までに救済した人間や異常な性格を持つ者に絞るのだ。俗な人間ならば我々に対する恩義や自らの信念に従い行動するだろう。我々が操るのに容易い者達ならば警戒は最小限で済む。我々が真に警戒すべきは英霊達のような強靱な心を持つ者だけで良い」

「……………」

「統括局より皇帝陛下へ。この案はどう思う？」

「…了承しよう。計画を変更し、一部の者達に活動に参加してもらおうように手配しよう。すぐさま行動してくれ。生命院と情報室は心身共に健康な者達に声を掛ける。視覚星と観測所は勧誘を。溶鉱炉、兵装舎は実動部隊の武装を考えてくれ。死なれては意味が無いからな。管制塔、廃棄孔は指揮を頼む。事後報告で構わないから後で報告を」

「統括局ゲーティアが72柱を代表し、了解の意を示す。お前は寝ろ、もう0時を過ぎた」

「すまないな…」

「テキパキと指示を出す皇帝。まだまだ大雑把だが、これから凄まじい決断を国に対し

て何度も要求されるのだ。今の内から力を付けるに越した事はない。これもゲーティアの教育の賜物である。

だが未だ幼い身。深夜ならば眠くなるのは当然であり、この場をゲーティアに任せ、一人ベッドに潜り込んだ。

「統括局よ。フラウロスより一つの可能性を提示したい」

「許可する。何だ？」

「これからの計画において、やはり人間の可能性は否定できない」

「フォルネウスより抗議。私が担当した第三特異点ではメディアリイは我々の力に屈した。英霊でも圧倒的な力の前に自らの力を十全に出せない事があるのだ。異世界とはいえ、俗な人間ならば我々が手駒に取ることは容易い」

「サブナツクより抗議。メディアリイの話題はやめろ。ハーゲンティが狂死寸前だ」

「ゼパルより叱咤。魔神でありながらトラウマをまだ克服できんのか」

「アミーより提唱。議論が逸脱している。フラウロスの意見も最もである」

「バアルより提示。俗な人間の中にも逸脱者は存在する。あの藤丸立花も元はただの一般人だ。今後、藤丸立花のような人間が出現する可能性など不愉快極まりない」

「カイクより提案。不安要素がある人間には簡易的な洗脳工作をしてはどうか。自らが

正しい事をしてしている認識ならば、反逆の可能性は低くなる」

「ダンタリオンより補足。洗脳は周囲の環境によつて解除や異変に気付かれる可能性がある。ここは扇動行為程度にしておこう」

「ナベリウスより報告。武装作成にあたつて接触したい人間が存在する。ハルファスと共に接触許可を」

「統括局より却下。そう急ぐな。管制塔に詳細を報告し、決議せよ。一刻も早い行動を望むが、妥協など不認。心して活動せよ」

ここ数日、帝国では一部で混乱が起きていた。

一部の貴族、高官が使用人が誘拐されたと騒ぎを起こしたのだ。自宅の豪邸に住み込みで働く使用人の大多数が姿を消した、という報告を受け、帝都警備隊だけでなく宮殿警護の近衛までも駆り出され、徹底的な調査が行われるも、これといって情報は出てこなかった。

帝都に住む者達も誘拐された人々の安否を気遣う……などということは無かった。

それと言うのも誘拐を訴えた貴族が外道の噂が絶えない者達であり、使用人というの

も彼らの悪行に耐えられずに逃げ出したのではないか、と考え特に心に残らぬまま、たわいの無い噂となった。

しかし、帝都に住む市民達にはあずかり知らぬ事だが、実際は使用人が誘拐された貴族や高官の数は訴え出た者達の数倍の数である。使用人と方便を並べているも、誘拐された者達はほぼ全員が非人道的な手段で手に入れた奴隷使用人である。

故に最近活動が活発化している親衛隊を恐れ、訴えない者達が大多数となった。訴え出た者達は自らの地位に絶対の自信を持つ者達馬鹿だけである。

???
side

眠い。

今の生活に不満と怒りしか無い中で唯一と言ってもいい癒しの時間が睡眠だ。

昼夜問わず、命令されれば、主人あいつが満足するまで奉仕し、時には人間であることすら許されない行為もする。

だが、今は耐えるしかない。

全てはいつの日か復讐するために。

三人で地方に出稼ぎに行くつもりで帝都に足を踏み込んだ。

そこで要求されたのは自らを家畜以下に扱う畜生共の戯れ。

親友の一人は目の前で目を潰され、もう一人は脚を折られた。

いつか必ず三人で帰るために、主人あいつに尻尾を振る。

プライドなんてとつくの昔に捨てた。

だが眠い。

昨夜は幸運にも夜の相手を求められなかったので、首輪付きであるがゆっくり眠ることができた。

だがもうすぐこの時間も終わる。早く起きなければ主人あいつの機嫌を損ねてしまう。

早くこのフカフカのベッドから起きなければ……

フカフカのベッド？

意識を覚醒させると自分が横になっている寝床を確認する。シミひとつ無い白いベッド。

あり得ない。あの家のベッドは派手派手のものだし、そもそも昨夜はロクでもない場

所で寝たはずだ。

周囲を見回す。そこには白いカーテンしか無かった。

明らかにおかしい。もしや主人あいつの新しい戯れだろうか。

疑心暗鬼ながらも起きようと身体を起こす。

まず、二つの事に驚いた。

一つは首輪が無くなっていったこと。

もう一つは裸で寝たはずなのに白い服を着ていること。簡素であるが決して使い古しでないことがわかった。

もしかして……もしかして……と、自分の中から一つの感情が湧いてくる。

おぼつかない足取りでカーテンの向こうに進もうとする。

そこでカーテンを勢いよく開けられる。

「目覚めたか」

そこに立っていたのは一人の女性。銀色の髪を束ね、赤い服を纏っており、その瞳は紅かった。

「あなたは……」は……

女性だったので幾分か安心した私は心の奥にあつた言葉希望を吐き出す。

「安心しろ。我々は全てを救う。この国もお前達もな」

優しい声だった。安心できた。この人なら大丈夫。

「うわあああ!!?」

思わず泣き出してしまい、目の前の女性に寄りかかってしまう。

「汝ら、病めることなかれ…」

彼女がそう呟いたのを今でも覚えている。

side out

「グス…ごめんなさい…」

「構わない、感情の吐露は君の経験を鑑みれば必然。よく頑張った」

一通り泣いたエアアと言う名の少女は、ナイチンゲールの姿を模した魔神サブナックと相対していた。

「君の容態は順調だ。幸い、性病などの反応は無く、もうしばらく入院したらこちらで身元を預かろう」

「私より友達が…ルナとファアルが…」

「友人か：すまないが今は立て込んでいてな：」

「お願いします！二人を助けて下さい!!？」

「落ち着きたまえ。君の友人かどうかは分からないが、昨夜保護した人々の中にいるかもしれない。だが君の身体が：」

「大丈夫です！探させて下さい！」

結果、車椅子でエアをサブナックが運ぶという事で決着した。

ナイチンゲール本人ならば有無を言わずベッド行きだっただろう：

結論から言えばエアの友人、ルナとファルは見つかつた。だが彼女達がいたのはエアがいた魔神柱が貸し切つている施設では無く、時間神殿内の集中治療空間だった。

双方、心身共に多大な傷を負い、下手をすれば自殺しかねない程だった。

「彼女達の現状は芳しくない。だがここで安楽死という手段は取らない。何があろうとも彼女達を救つてみせよう。そこでエア。君の協力が必要だ」

「私ですか？」

「身体のケアは我々ならば容易い。だが心のケアは友人であるお前が適任である。それと時間神殿まで見せた以上、タダでは帰れんぞ。療養後、しばらく看護婦として活動してもらおう」

「わかりました！必ず二人を救つて下さい!!？」

「…以上でサブナツクの報告を終了する」

「バルバトスより報告。今回の誘拐行為によって帝都の警備状況、防犯意識が判明した。今後の誘拐行為の際はより瞬時に行動できるだろう」

「バラムより反論。誘拐行為は下手をすれば痕跡が残ってしまう。魔術が使えぬとも、帝具を使用すれば痕跡を発見される可能性がある。今後は行動を控えるべきだ」

「グラシャールボラスより抗議。我々が保護したのは全体の三分の一にも満たない。ただ助けを求める者達が存在する限り、行動を続けるべきだ」

「統括局より決断。今後は機を見て小規模に実行する。助けを求める者達がいるのも事実であるが、功を焦り、計画に異常をきたしては元も子もない。粛清部隊の調子はどうか」

「ハルフアスより報告。協力者達の働きは想定より素晴らしい。ただ、一部の者達は感情を抑えきれず、目標を殺害しかけた」

「ベリアルより想定。彼らは現在まで虐げられてきたのだ。感情が爆発するのは至極当然。だが彼らに重荷を背負わせる事は許容しない」

「ナベリウスより報告。部隊に支給する武装の試作品が完成率90%を超えた。何らか

のテストを要求する」

「グシオンより報告。協力者達の情報により、肅清リストに導入すべき存在が追加。全同胞に裁定を要求する」

「エリゴスより追加報告。帝都警備隊長オーガは看過できぬ不正を働いており、更に奴を排斥することで帝都警備隊を我らの手中に収められるという利点も存在している。肅清してもさして影響を及ぼさないだろう」

「統括局より統括。肅清部隊については現状維持。決して彼らの手を汚してはならない。武装試験については保留とする。肅清対象のリストは私から陛下に渡しておこう。警備隊の処置についても陛下の判断にて実行。対象の動向を観測せよ」

「フォラスより提案。警備隊長オーガは本日は非番である。動向を観測するのは難航するであろうが、奴が明日、警備隊屯所に出現した際に奴の罪を明らかとし、警備隊員からの信頼を地に落とせば警備隊の掌握も容易くなるであろう」

数時間後……

「…フォラスより報告。警備隊長オーガの死体を発見。刃物で斬り捨てられており、下手人は不明」

「節穴か！ フォラス!!? 何が明日やればいいだ！ 対象が怨恨によって殺害されるという可能性は十分にあつただろう！」

「失敬な！ 対象のオーガが私の予想を超えて弱かったただけである！ 節穴はフラウロスだけで十分だ！」

「フォラス、貴様ア！ 誰が節穴だ！ ロマニ・アーキマンの正体を見抜けなかったのは我々全員の失態である！」

「いや、そも、フラウロス担当の第二特異点も十分失態である」

「喧しい！ それを言うなら音楽馬鹿のアムドウシアスやメディアリリーのパンケーキも同罪だ！」

「アムドウシアスより否定。私は本当に美しいものを見た…（尊死）」

「ハーゲンティより否定。召喚先で英霊数体に囲まれてはひとたまりもない。後、次に私をパンケーキと言ったら殺す」

「キアラ様（小声）」

「ああああああ!!」

「ゼパルが死んだ！」

「この魔神でなし！」

「何これ？」

「我々による黒歴史の暴露会だな。節穴にパンケーキ、ゼパった被害者だ。ああはなるなよ」

何がなんだかわかっていない皇帝だったが、魔神柱が人間臭い事と黒歴史が恐ろしい事だけは頭に刻んでおいた。

所変わって、ナイトレイドと呼ばれる暗殺集団のアジト

彼らは国を変えてみせるという信念と、そのためならば修羅に落ちることもいとわな
い覚悟を併せ持つ者達である。

基本的に革命軍の命で動くが、帝都に住む人々から依頼を受け、悪人を斬ることもあ
る。

そんな集団に新入りが入ってきたのだ。名前をタツミ。まだまだ未熟だが、既に何人
かのお眼鏡にかなう逸材である。

そんな新入りの初任務。帝都警備隊隊長、オーガの暗殺。警備隊隊長の権力によつて
悪の商人から賄賂と引き換えに悪事を黙認し、あろうことか無実の人間に罪を被せ処刑
する外道である。

当初はそれなりに腕の立つオーガ相手ということで不安な者も多かったが難なく暗殺し、無事にナイトレイドの一員となった。

「さて、みんな今日は御苦労。ゆっくり休んで欲しいんだが、その前に帝都で新たな情報だ」

ナイトレイド団長、ナジエンダの一言でメンバー全員の顔が真剣なものに変わる。

「帝都で誘拐事件が発生したのは聞いているな。その新しい情報だ。誘拐された者達の安否は不明だが、私はこれに親衛隊が関わっていると睨んでいる」

「親衛隊？」

タツミの頭に？のマークが浮かんだのですぐさま解説が入る。

「タツミが知らないのも無理はない。親衛隊、正式名称は皇帝直属親衛隊だが奴らはほんの数日前に突然現れたんだ」

「大臣が皇帝に貸し与えた兵士おもちゃつて訳じゃねえ。少なくとも、ここ数日までに全く情報が出てこなかったんだ」

ナイトレイド一員であるブラートの声には僅かであるが疑問の感情が見え隠れしていた。

「革命軍の密偵やスパイの力量不足なのかもしれないが、帝国の軍隊にも匹敵する人員が出てきたつてのに、事前に全く情報が無かったつてのは異常だぜ」

「そしてその行動も謎が多すぎる。周りの貴族や高官を片っ端から粛清しているんだ」「え？それっていいことなんじゃ…」

「確かに悪人を処罰してるのはいい事だ。だけどあの帝国だぞ。民がいくら苦しもうと増税し、帝国の闇をずっと放置してきたんだ。今更、何をしようとしてるんだ？」

ナイトレイド及び革命軍では親衛隊の対処について意見はバラバラだが、不気味な存在という事は共通認識である。

少なくともあの帝国が善意でやる事ではない。上も下も腐りきっている帝国が今更、こんな事してもマグマに水である。

「だが、わからない事をいくら考えても仕方ない。例え親衛隊が私達の様な信念を持っていたとしても、今は敵同士。だが接触は控える。噂だが大臣が依頼した暗部が壊滅したらしい。真偽の程は定かではないが、並みの人間でない事は確かだ。敵対すればタダではすまない」

「暗部…」

暗部という言葉に僅かに反応を示したのはアカメという少女。詳細は省くが、彼女の妹は帝国の暗殺部隊に所属している。

「心配するな、アカメ。暗部といつても雇われの二流だ。クロメは関係ない。話が逸れたが、今回の誘拐事件以降、親衛隊の活動が活発化している。偶然にしては出来すぎて

いる」

何の手がかりも無い誘拐と活発化した親衛隊。ナジエンダはこの二つを結びつけた。

だが、親衛隊の活発化も肅清した対象が一日に7、8件になっただけの微々たるものであり、そこに目をつける彼女の観察眼はさすがと言えるだろう。

「親衛隊が押し入った家には金品はおろか、人つ子一人いないらしい。拉致した人々を何らかの形で利用しているのでは、と私は考えている」

「だったら早く何とかしないと！」

「落ち着け、タツミ。まだ奴らが悪と決まったわけじゃ無い。下手に突けば何が出るか分かったものじゃ無い」

本来ならば相手が大臣だろうが將軍だろうが、悪ならば斬り込むナイトレイドだが、今回は相手が善か悪かわからない上に、何が飛び出てくるかわからない危険な箱である。下手に触らないのも一つの方法だ。

「明日からタツミはマインと帝都に情報収集だ。どんな些細な情報でも構わないが、親衛隊の事は頭に留めておいてほしい。レオーネとラバックも同じだ。後、もし親衛隊に会っても極力関わるな」

「随分、消極的だね団長。接触はしてもいいんじゃない？」

ナジエンダの言葉に疑問を覚えるレオーネ。彼女は団長の今までにない慎重さに疑

問を抱いていた。

「レオーネ。これは私の勤なんだが奴らはヤバイ。強さを身にしみて覚えたエスデスとは違ったヤバさを感じるんだ。たった一の情報で十を理解されてしまうような感じだ」

ナジェンダはかつて帝国の將軍として戦地に赴いた事もある。そんな膨大な彼女の戦いの経験が警鐘を鳴らしている。

「…そんなに言うなら注意しとくわ」

「すまん…さ！明日も早いぞ！みんな寝よう！」

帝国の悪を正すという目的は同じである二つの集団。

殺し屋集団 異世界からの人類愛
ナイトレイドと皇帝直属親衛隊

目的は等しくも立場は正反対。彼らの邂逅がどんな波乱を呼ぶのか。

未来を見通す千里眼の持ち主しかわからない事である。

帝具VS宝具

「…よつてシヨウイ内政官は謹慎一ヶ月、及び内政官の任を解く。十分に反省するが良
い」

「……申し訳ございませんでした」

謁見の間に重苦しい空気が流れる。

それもそのはず。何しろ帝国で一、二を争う実質的な権力者同士の激しい論争が今、
決着したのだ。

「さすが陛下。我々の意見を取り入れての素晴らしい判断でしたな」（全く死刑にすらで
きないなんて。まあ、目障りな奴が失脚してくれるのはありがたいですがね）

「そうか。大臣に褒められるとは余も中々だな」

「全く、今後の成長が楽しみですね」（さつさとゲーティアを排除して、すぐに傀儡にし
てあげますからね）

肉を食いちぎりながら笑いかけるオネスト大臣。だがその笑みは作りものである。
本来ならば、皇帝のすぐ横にいる男に憤怒の顔をしてやりたいくらいである。

「全く、彼の主張は正当なものだったと感じるがね」

「皇帝陛下のお言葉に逆らう事は如何なる理由があろうと重罪です。死刑にならないだけ御の字でしよう」

「ふつ、下らんな」

一瞬触発。もしこれが漫画なら二人の間には火花が、これでもかと飛び交っているだろう。

シヨウイ内政官は皇帝陛下の政治に口出したとして、国家叛逆罪に問われ、オネスト大臣はこれを重罪とし、『牛裂きの刑』、つまり事実上の死刑を求刑。本来ならば、そのまま皇帝陛下の名の下に死刑だが、そこに待ったをかける人物がいた。

言うまでもなく、ゲーティアである。彼はシヨウイの言葉を正当なものとして無罪を要求。激しい論争の末、シヨウイ内政官にはそれなりの罰が下されたのだった。

「ボテイスより報告。シヨウイ内政官と接触、及び交渉に成功。彼からの情報ルートを確認した」

「アスタロスより緊急報告。オネストの遠縁にあたるイオカルがナイトレイドに殺害さ

れた。ついでに奴の護衛も全員殺された」

「アガレスより予測。オネストはナイトレイド討伐に尽力するだろう。考えられる策として北方に遠征中のエスデス將軍を呼び戻す可能性が高い」

「ウアサゴより補足。エスデスはその帝具及び実績より第一級警戒対象である。敗北はあり得ないが、計画が著しく停滞する可能性がある」

「マルバスより提案。計画を早めることを進言する。エスデスが戻ってから計画を進めるよりも、現時点に無理をしてでも計画を一定段階まで推し進める必要がある」

「エリゴスより肯定。部隊の活動を急がせよう。神殿に引き籠もっている溶鉱炉も手を貸せ」

「ナベリウスより了解。武装も試作が完成した。余分な人員をそちらに回そう」

「観測所を代表しフォルネウスより皇帝陛下へ緊急報告。指名手配犯『首斬りザンク』が帝都に侵入した。繰り返す。帝具持ちの殺人鬼が帝都に侵入した」

宮殿内部・大会議室

本来ならばただの会議をする場所であるこの会議室だが、現在の帝国の情勢では、こ

の場でする事はただの会議ではない。

この会議に皇帝陛下は参加せず、大臣以下の上層部だけの参加となる。つまり実質、この国の全てを決める重要な会議である。

今回の議題はナイトレイドなる賊……ではなく、最近姿を再び見せるようになった殺人鬼『首斬りザンク』である。

首斬りザンク。かつては帝国最大の監獄で首斬り役人をしていたが、大臣の執政のおかげで死刑囚が増加。結果、首を斬り過ぎて首を斬るのが癖になってしまい、帝具を盗み出し辻斬りとなった経緯を持つ。

その男が帝都に戻ってきたのだ。既に帝都警備隊の隊員数名が惨殺されるという実害も出ている。

「確か、帝都警備隊はあなたが新しく責任者となったはずでしたよね、ゲーティア」
「……」

「前警備隊長のオーガが死んだ後、すぐ様陛下に進言し、警備隊の責任者となったはずですが、これはどういう事ですか？」

まさに重箱の隅をつつくが如きの言葉である。

「これ以上の被害は避けなければなりませんね。すぐ様、討伐隊の組織をしなくては……その必要は無い」……ほう？何か提案が？」

「帝都警備隊の責任は私の責任だ。よって後始末も我々が引き受ける」

「…いかなさるつもりで？」

「親衛隊を動かす」

「「?!」」

皇帝陛下直属である親衛隊の活動。それについて苦虫を噛み潰した様な顔をする者がいる事は余談である。

「ほう…陛下直属の部隊をその様な私事に使つてよろしいので？」

「問題ない。動かすのはたった一名だ。それでザンクを討伐する」

「あ、相手は帝具使いですぞ！いくら親衛隊といえども危険です！」

反対するのは良識派の人間。彼ら良識派はゲーティアの存在は訝しんではいるものの、オネストに対抗する存在として認めている部分もある。故にもしこの一件で親衛隊の一人が負ければ、オネストに対抗する力が弱まってしまふ。それを恐れているのだ。

「問題ない。我々にも切り札は存在する」

だがそんな心配をもともせず、ゲーティアの目は僅かに揺らぐ事も無く、ただ真つ直ぐだった。

まだ人々が寝静まるには早すぎる時間。だが薄暗い通りには人っ子一人いない。

それもそのはず。殺人鬼が出現しているという情報が既に出回っているのだ。

ゲーティア主導の元、内部の腐敗を全て取り除いた帝都警備隊は昼間の内にザンクの出現の情報をばら撒いた。よって夜に外に出る真つ当な輩はいなくなつた。

「ハハハ、人っ子一人いねえ」

故に、外に出る者は真つ当な輩ではない。この男、首斬りザンクのように。

「全く、せっかく帝都に戻ってきたのに面白くないなくやっぱりナイトレイドが出張つてくるまで待つか」

「その必要は無い」

「おお？」

突如、ザンクの遙か後方から声が響く。

暗闇から現れたのは男。黒のローブを身に纏い、紅い瞳を持ち口からは僅かに鋭い歯が見えている。そして男のオーラからこの存在の異質さが伺える。

「いや、愉快愉快。数日でこんな斬りがいのある首と出会えるなんてな。やっぱり帝都はいい」

「一応、名乗っておこう。我が名はハルフアス。最後通告である。ザンクよ。自首する気は無いか？」

「…無いね、俺は首を斬るのが好きだからよくお前の首も斬らせてもらうぜ。ついでにその時の感想でも教えてくれよ」

「交渉決裂…武装展開」

ハルフアスの腕に漆黒の鎧が現れ、手には同じ漆黒の籠手と朱い爪が現れる。

「我は闘争を与えし者。だが平和を拒む事は無く。我らの悲願の為、汝は不要である！」
ハルフアスは力強く地を蹴り、ザンクに接近する。ザンクも応える様に帝具をフル活用し、迎え撃つ。

今、戦火の火蓋は切られた。

「むん！」

「おっと危ねえ」

「はあ！」

「おっと、ハハ」

客観的に見ればザンク優勢。ザンクには傷一つなく、ハルフアスには所々に斬り傷が

ある。

最初、ザンクはハルフアスの攻撃を受け流すつもりだった。帝具『五視万能スペクトッド』は洞視、遠視、透視、未来視、幻視の五つの力で情報に関して絶対的なアドバンテージを作れる。これを利用すればハルフアスの攻撃も受け流せる筈だった。

しかし、帝具の特性上、相手の腕力は見抜けなかった。予想以上のハルフアスの攻撃を受け、驚愕するも何とか無傷で済み、現在はハルフアスの攻撃を帝具を使用して避け、隙をつけて僅かに傷をつけているに過ぎない。ザンクが余裕に見えるのも彼が喋り続けてるから、そう見えるのである。

実際にはこのまま経過すればザンクは不利になる。ハルフアスは当初は素人の様な動きだったが、時間が経つにつれ動きが向上してきた。驚愕の成長スピードであるが、これはハルフアスの正体から見れば当然である。

魔神柱として顕現した場合と人間の（正確には英霊の）姿をとって顕現した場合では大きく異なる。

まず、体の作りが人間と違う。胸に心臓が、頭に脳があるのが普通だが、魔神柱の場合は頭部には思考回路が、心臓部に霊核が存在しているのだ。

そして魔神柱の体と人間の体では操作も違う。手足が存在する分、行動面において多くの操作を要求される。更に魔神柱には人間体での実戦経験が無い。今までの粛清活

動などでは効率良く進める為、魔術を使っていたが今回は新しく作った武装の試験も兼ねており、魔術の使用を控えている。

しかし、彼らは人智を超えた存在。幸い、戦闘^英の達人^雄なら幾らでも見てきた。彼らの動きと自らの動きを重ね、その差異を調整するのは片手間でもできる。

「ちよこまかと…」

動きを調整してもなお、ザンクを捉えられないのはザンクが帝具の能力、未来視で回避し続けるからである。

「聞いてはいるぞ。その帝具、対象の筋肉の動きから未来の動きを読むらしいな」

「そうそう！おかげで百発百中！あんたの動きも良く見えるぜ！まあ、あんたみたいな単純な奴の攻撃を読むのは、帝具無くても楽だけだな」

「…そうか」

戦闘に関してはまだ素人といっても良いハルフアスト、修羅場をぐり抜けてきたザンクとの経験値の差が、未だに決定打を与えきれないでいる。

「時間がもつたいない。次で殺す」

「ククク、愉快愉快。次でこつちも終わりだ」

瞬間、帝具の能力が発動される。

「……」

ハルフアスの前にいた人物はザンクでは無く、一人の少年。

頼りなげな印象を受けるが、その眼は真つ直ぐで大いなる希望を秘めている。杖を持ち、頭には冠を被る少年。この国の皇帝陛下である。

スペクテッドの能力であり、ザンクの切り札。幻視である。今、ハルフアスの前には最愛の存在が見えているのだ。

だがここでは悪手である。

「…下らん」

朱い爪を横薙ぎに払い、幻視で見えない筈のザンクへと視線を移す。

「なっ?! 何故だ?! 最も愛する者が見えた筈だぞ?!」

「我に愛など不要。第五特異点^あ所^場では多くの愛の物語を見せてもらったが、元より私に愛すべき者など必要ない。あつたとしても主への親愛のみ」

その無機質な瞳で真つ直ぐザンクを見据えるハルフアス。奥の手が潰された事で、動揺するザンク。

「終わりだ！」

「うおお！死んでたまるか！」

動揺したが幾分か冷静なザンクは、スペクテッドをフル活用し、未来視と洞視を使ってハルフアスの隙を見つけ出し、斬る。

ガギン!!

「……ぐふつ。て、てめえ……」

血を流したのはザンク。彼の腹部には朱い刃が突き刺さっている。

しかし、彼の手にある剣はハルフアスの首を捉えている。

だが、剣は折れ、ハルフアスの首には漆黒の鎧、否、もはや甲殻と呼ぶに相応しい物がある。

「悪いな、これは元々、身体を覆う鎧だ。名を『クリード・コイン・ハイ噛み砕く死牙の獣』。腕だけで戦うつもりだったが、闘争とはそういうものだろうか？」

「へへ、ちげえねえ……」

元よりこれは決闘などという行儀の良い事ではない。ザンクにとつては生死をかけた戦いであり、ハルフアスにとつても失敗は許されない戦いだった。まあ、ハルフアスには元より失敗する気など微塵も無かったが。

故に、双方どんな手も使う。決闘ならば卑怯とされる隠し技も闘争においては賞賛されて然るべきである。

「事、生存において善悪の優劣は無い。ザンクよ。残す言葉はあるか？」

「ああ……ありがとう……」

「……………」

腕を振り、ザンクの首を切断する。どこぞの鬼でも無い限り、確実に絶命する一撃。

「……………ふつ。やはり人間共は理解に苦しむな」

ハルフアスはザンクの死体を担ぎ、帝都の闇に消えていった。

翌日、謁見の間にて皇帝とオネスト大臣達の前で、ザンクの討伐報告と帝具『五視万能スペクテッド』を献上した事で、首斬りザンクの事件は決着し、人々の記憶から忘れ去られようとしていた。

尚、帝都郊外の共同墓地に墓が一つ増えた事に気付いた者はいなかった。

帝都の中心街に位置する病院。国立病院として名高いこの病院ですら、帝都の闇の一つである。病院上層部の人間の腐敗により、法外な治療費を請求される事も珍しく無い。よつてこの病院の患者は警備隊や兵士など所謂、公務員の様な者達ばかりだった。

「ありがとうございしました！本当になんとお礼を申し上げれば良いか」

「いや、貴方達の無事が何より。お大事に」

病院の入り口での一組の親子と医者とのやり取り。これも本来ならあり得ない光景だった。

大きく変わったのはほんの数日前。親衛隊が病院に押し入り、腐敗した上層部の人間を全て粛清。ついでに腕が悪いが賄賂で医者になったヤブ医者も逮捕した。勿論、全て皇帝陛下の名の下に、である。残った職員と親衛隊によつて、この病院は生まれ変わったのだ。

そして生まれ変わったのは、病院だけでは無い。

「本当に良かったよ……ルナ、ファル」

「本当、奇跡だったわ」

「ええ、全く…」

彼女達、帝国の闇の被害者達も新しく生まれ変わったのだ。

「あの人は神様か何か？ 私達の手足、すごく調子良いんだけど。これ、義手よね…」
「私の眼も義眼なんだけど…元の眼よりいいかも」

彼女達のように悪人に弄ばれた人々には、四肢欠損や失明などの深刻な傷害を負った者が多く居たが、彼らに義手や義眼を作成し、提供しているのだ。当然、作成は魔神柱達である。

ちなみに、この病院を肅清したのは彼ら被害者達の治療場所を作る為でもあった。

「確か『どこぞの冠位人形師にできるのだから、我々にできない理屈は無い！』って言うってたわ。何でも本人の体を元に作るから、拒絶反応もないそうよ」

「言ってる事のほとんどが理解不能よ…」

魔術もクローン技術も無いこの世界の人々からすれば、まさに神の所業と言っても過言ではない。

ちなみに、この義肢作成には魔神柱以外の人物が関わっているのだが、それはおいおい。

「あつ、そういえば、退院したら是非、私達に任せたい仕事があるって、サブナック様が言ってたわ」

「…サブナツク様なら安心だわ」

「そうね…」

仕事という言葉に敏感になる彼女達だが、彼女達の経歴を考えれば無理もない事である。

彼女達のように友人によって心のケアが済んでいるのは、極一部であり、ほとんどはまだ心が壊れかけている者達ばかりである。

「今日、顔合わせをしに来られるそうだけど…」

「エア、居るか？」

「あ、いらっしやったまいたいね。はい、どうぞ」

「うむ。順調に快方に向かつて居る様で何より。さて、今日は君達の仕事の管理者を連れてきたのだ。ラウム、入ってくれ」

「うむ。失礼する」

現れたのは気の良さそうな中年の男。これと違って特徴も無いが、どこか怪しげな雰囲気を感じさせる。

入ってきたのが男性と知るや否や、三人の表情が歪む。自らに非道な行為をしてきた男達の事を思い出してしまったのだろう。

「む、これは申し訳ない。気を悪くした様だな。もう一人の管理者のグラシャ||ラボラ

スは今、手が離せなくてな。奴ならば問題無かったのだろうか…」

「手が離せないとは、何事だ？」

「最後の通信が『天使達と戯れている』だったのだから」

「…仮にも悪魔がそのセリフはどうなんだ。後で廃棄孔に連絡して処罰だな」

「…ほどほどにな」

「あ、あの…ラウムさん、でしたっけ？私達は何の仕事をするば…」

エアが恐る恐る尋ねる。

「ああ、そうだったな。何、心配しなくていいとも。君達の職場に男性は私だけだ。その仕事は…」

その仕事を聞いた時、彼女達の表情はとても嬉しそうなものに変わっていた。

セリユー・ユビキタスという少女について一言で表すならば、『正義異常者』という他ないだろう。

父親を凶賊に殺害された過去から『悪』に対して異常な嫌悪感を示す。そして帝都警

備隊や自らを『絶対的な正義』と信じて疑わない。

これだけならば彼女はただの正義執行に燃える警備隊員だろう。

だが、彼女には他の隊員には無い特徴があった。

それは帝具の適性。帝具の名は『魔獣変化ヘカトンケイル』。生物型の帝具であり普段は愛らしい犬の姿だが、戦闘態勢をとれば凶暴な姿になる。弱点である体内の核を破壊されなければ、彼女の命に従い続ける帝具である。

だが、平時は可憐な（に見える）少女である。そして彼女は帝都警備隊員としてだけではなく、個人的にもオーガ隊長を尊敬しており、彼の死に対して心を痛めていた。

故に、新たに彼女の前に現れた人物について心を許してしまうのは致し方無いことである。

最も、向こう側には彼女を手中に収めようとする意志があったようだが…

「じゃあ、行きましようか」

「おい、待て。話を聞いてたか？」

「ええ、正義を執行するんですよね。さあ、行きましよう！悪はすぐそこです」

「おい！話を聞け！」

「見つけたぞ！帝都を荒らす悪党共め!!」

「くそ！正義バーサーカー狂め！白衣ナイチンゲールの天使のように話を聞かん奴だな！」

……手に収められるといいなあ……

両断と塵殺

「離して下さい！私は隊長を殺したナイトレイドを殲滅しなきゃいけないんです！」

「ええい！話を聞け！コロも頭に噛み付くな！地味に痛いんだぞ！」

（なんだこの状況…）

少女を羽交い締めにして必死に止める男と、その男の頭に噛み付く犬の様な生物。そしてそれを呆然と見つめる二人の少女。しかも少女の手には巨大な銃器とハサミがある。

はつきり言つてカオスである。

「ねえ、マイン。今の内にまとめて撃つちやええば？」

「……今回ばかりはあんたの天然さに感謝するわ」

相手が取り込み中に攻撃を仕掛けるなど空気が読めていないが、天然なのがシエーレという少女の特徴である。

「ああ！くそ！わかった！ユビキタス、貴様はあの銃を持っている女を相手にしろ！最悪殺しても構わん！」

「やっとわかってくれましたね！ではハルフアス殿はもう一人の奴を！」

結局、男ハルファースの方が折れて、戦闘開始である。だが…

「遅いわよー！」

既に帝具『パンプキン』を構えていたマインが引き金を引く。帝具の性質上、ピンチでなければ威力が向上しないが、それでも人間二人を死に至らしめる威力である。

最も、相手はどちらもただの人間ではないが…

「コロー！」

「武装展開」

爆煙の中から出てきたのは、巨大な壁コロ。そして漆黒の鎧と朱い刃。

「コロー！『捕食』!!」

すぐさま、セリユーは帝具に指示を飛ばし、自らも旋棍銃トシファアガン化を装備する。

「ガアアア!!」

コロが大きく口を開け、突進する先に立つのは巨大な鋏を持つ少女、シエーレ……ではなく、パンプキンを持つマインの方である。

「っ！」

「マイン！っ!？」

間一髪、コロの突撃を回避したメイン。そして助けに入ろうとしたシエーレに、強力な一撃が襲う。

何とか帝具『万物両断エクスタス』で一撃を受け止めるも、その衝撃は桁外れのものだった。

「ほう。今の一撃で傷一つ付かんとは…さすが『万物両断エクスタス』だ」

「あなたは…一体…」

シエーレの前に立つのは上半身を漆黒の鎧に包み、頭頂部には紅い角、両腕には血のように紅い刃をまるで危険種の爪のように付けた男だった。

おそらく、先程までセリューという少女を引き止めていたハルフアスという男だろう。

「名はハルフアス。皇帝陛下直属の親衛隊の者だ。陛下の名において貴様ら、ナイトレイドを捕らえる」

「…親衛隊…（なんでしたっけ？）」

口に出していたら、ハルフアスは間違わずっこけていただろう。

「貴様ら暗殺者にこれ以上語る事は無い。加減は無しだ！」

「はあああ!!」

万物両断の刃と万物殺戮の刃が激突する。

「コロ！ガードしてー！」

「甘いわね！」

ヘカトンケイルコを操りながらも自ら銃を撃つセリユーと、パンプキンを持ちながら素早い動きで銃撃を続けるマイン。二人の攻防は膠着状態になりつつあった。

セリユーはコロと合わせ、二対一で優勢だがパンプキンの予想外の火力にコロを防御にしか回せず、自らの銃撃だけでは相手に有効打を与える事ができなかった。

対してマインは、『二対一』というピンチにパンプキンの威力は増大していたものの、コロの防御力と再生力によって使用者のセリユーに攻撃が当たらなかつた。

だが、この攻防が長引く事は無い。

セリユーがマインの攻撃を中断させるか、マインがコロの核を見極めれば。あるいは、もう一人の仲間の戦いが終われば…

(もう少しで…)

互いに相方の勝利を信じて、戦いは激化する。

「はあ！」

「ちい！」

ハルフアスは焦っていた。

理由は自らの情報不足にある。

既に首切りザンクとの戦闘を経験し、同胞が作り上げた鎧『クリード・コイン噛み砕く死牙の獣』の扱いに最も慣れているハルフアスに、今回の一件の白羽の矢が立ったのは必然だった。

そこまではまだいい。問題はナイトレイドの実力と帝具の性能を過小評価していた事だ。

まず、ナイトレイドの実力をザンクと同等と評価していた事だ。まともな訓練や過酷な戦場に身を置いていたアカメやブラート、ナジエンダに関してはそれなりの警戒をしていたが、他のメンバーについてはある程度警戒してはいるものの、やはり目立った武功が無かったため、警戒レベルは低い。

といっても、現状においてはこの問題は微々たる誤差だ。問題は…

バキイ!!

「ちっ!」

『万物両断エクスタス』の予想以上の切れ味である。刃を交えれば必ず、こちらの刃が折れる、というか切断されている。

『噛み砕く死牙の獣』はこの世界から採れる素材に魔神柱の技術を掛け合わせて作成された。当然、魔神柱達も妥協はしなかった。あらゆる魔術や技術をつぎ込んだ。オリジナル 原典には及ばないが、1000年前に作られた帝具以上の性能になっていると信じて疑わなかった。

だというのに、これはどういうことか。

すでに切られた刃は二桁にのぼる。魔力を回せば新たに刃が再生する機構を組み込んではいえるものの、これでは勝てない。

(1000年前の武具というのに、未だ切れ味は健在だと?まさか…否、それは視覚星と情報室が『ありえない』と結論したはずだ…だが)

「そこです!」

「!?しまっ…!」

ハルフアスが脳内で思考していた間、自らの動きが鈍っていたのに気づかなかった。そして相手はそんな隙を逃す者ではない。

ザン!!

「ハルフアス殿!」

「……」

間一髪、急所は避けたが代償に、右手を手首ごと切断された。ハルフアスの手首からは血（に偽装した液体）が流れ出ている。

「終わりです。せめて苦しむ前に……」

「不要だ。まだ勝負はついていない。そして謝罪しよう。私は貴様を過小評価していた」

並列思考しているはこの女に勝てない。そう判断したハルフアスは頭にくすぶり続ける疑問を一端放棄した。

「その少女よ。名を聞いておこう」

「シエーレです。えつと……そちらは……」

「ハルフアスだ。忘れるの早すぎやしないか? まあいい。次で終わらせてやる」

ハルフアスの体から莫大な魔力があふれ出る。魔力放出による一撃で、決めるつもり
のようだ。

対するシエーレも次で終わらせるといふハルフアスの言葉が、はったりでも何でもな
い事を感じ取る。

そして、激突する。

先に動いたのはハルフアス。ランクにしてA相当の魔力放出で過去最高速で飛び出
す。

しかし、シエーレには決して見切れないスピードではない。だが、カウンターをする
には速すぎた。

すぐさま、エクスタスで防御する。下手すれば腕の骨が折れるかもしれないが、防ぐ
以外の選択肢は無かった。

そして、彼女の運命は決定された。

「抉れ『抉り穿つ塵殺の槍』」

シェーレの耳は確かにその言葉を聞いた。

「えっ?」

エクスタスは確かに紅い爪を防いでいた。

だが、爪は五本ではなかった。

まるで木の枝。あるいは茨。

五本しかない爪は、幾重にも分かれ、数十本の槍のようになっていた。

そしてその一部がシェーレの腹部を刺し貫いていることに気付いてしまった。

「シェーレ!」

「ユビキタス!奥の手を使え!けりをつけろ!」

「了解です！コロ！狂化!!」
奥の手

指示を受けたコロの身体が豹変し、咆哮する。

余りの大音量に、近くにいたマインは耳を塞ぐ事を余儀無くされた。

そして、そこを見逃す相手では無い。

「????????
 !!?」

「なっ!? あああー!」

「よし！コロ！そのまま握り潰せ!!?」

動けなくなったマインをコロがその豪腕で掴み、セリユーが握り潰すように命じる。

「致し方ない。ナイトレイドは一人しか生け捕りに出来なかつたが、帝具二つを土産にすれば問題ないだろう……うん?」

セリユーの方を注視していたハルファス。その時、シエーレを串刺しにしていた左腕に妙な感覚があった。

そして、その側方を全力で駆ける者がいた。

ザー！

「シ、シエーレ!?」

「大丈夫…マイン…」

「私よりあんた…その傷で…」

「ごめんなさい…マイン、貴方だけでも逃げて。私が時間を稼ぐわ」

「そんな……だつたら私も、つつ！」

コロの豪腕を切断し、マインを救出したシエーレ。

そして殿として残ろうとするシエーレに加勢したくとも、先程の戦闘で腕の骨が損傷したマイン。これではただの足手まといになってしまう。

だが、マインは親友とも呼べる存在を見捨てて、自分だけ逃げる行為を平然とできる人間では無い。何とか、共に逃げようにも、それを許す二人ではない。

「ユビキタス。ちようどいい。二人共生け捕りだ。銃を持っている方は任せる。最悪、手足の二、三本コロに喰わせてもいいだろう」

「……まあ、妥協しましょう。ですが、必ず死刑にしますからね！」

セリユーと合流したハルフアス。ハルフアスの右手は切られているもの、左腕の一撃だけでも十分致命傷になり得る。さらにセリユーの方は目立った傷は無く、対してマ

インとシェーレは共に軽くない傷を負っている。

状況は圧倒的に不利。このまま戦えば間違い無く二人共捕まるだろう。

「お願いマイン！行つて!!？」

「くっ！〜!!？」

「逃すものか！」

「『エクスタス』！」

エクスタスの奥の手、金属部分を発光させ、強力な目眩しをする。

突然の発光にハルファスとセリユーも共に目が眩み、マインを見逃してしまう。

「ここは行かせません」

「…失策だったな。ユビキタスの言う通り、応援を呼んでおくべきだったか」

そう、今回の戦いに警備隊の増援は呼ばなかった。ハルファスとしては自らの手の内を知る者は少ない方が良いし、セリユーも警備隊の仲間が巻き添えをくらかもしれない、と話せば応援を呼ぶ事はしなかった。

しかし、現在はそれが裏目に出て、マインの逃亡を容易にしてみました。

「ユビキタス。お前はよくやった。これは私のミスだ。故に、貴様だけでも私が直接手を下してやろう」

「わかりました…ですが、コロを使って追跡してみます」

「させません！『エクスタス』!!」

再び、強力な光が周囲を包む。まだ光に慣れないセリューとコロは再び目を潰される。

(このまま、マインが逃げる時間稼ぎを…)

「ふむ、やはり反射ではないのだな」

(!?)

眩い光の中にいたのは、漆黒の鎧と紅い爪を持つヒト。

「興味深い。だが、まずは貴様だ」

(っ?!?マズイ!)

思わず後ろに退避しようとするが、先の戦闘で受けた傷と出血で思うように動けない。

「絶望に挑め」

(ああ…)

「噛み砕く死牙の獣!!」

(ありがとう、ナイトレイド…私の居場所…)

「ハルファス殿……ご無事で？」

「うむ。さしたる問題は無い。こいつはこのまま、牢にぶち込んでおく」

ハルファスの左手には、無数の槍で刺し貫かれたシエーレがいた。

このままだと死んでしまうので、同時に治療魔術を併用している。ただ、流石に気絶はしているが。

「ご苦労だったな、ユビキタス。すまないが、新隊長に報告をお願いしたい。後で、私からも奴にお前の活躍を報告しておこう」

「いえいえ、私は正義^{当然}執行^{の事}をしていましたので。では、殿に報告に行ってきます」

敬礼し、軽い足取りで駐屯所に向かうセリユー。とて^{????????}も、先程まで激戦を繰り広げていたとは思えない。

「さて、まずはこいつを牢に入れて、同胞達にあの問題への疑問を報告するか」
そう言うのと、用意していた転移術式を起動し、指定された場所に移動する。

「まさか……この世界にあの技術が？帝具についても詳しく調べる必要があるな」

ハルファスが再生させた右腕には、帝具『万物両断エクスタス』が握られていた。

「溶鉱炉を代表し、ナベリウスより報告。試作武装にさしたる問題無し。ただし、予想以上に損傷が激しい。ハルファスはどの様な運用をしたのだ」

「ハルファスより反論。これは帝具の性能を過小評価していた我々全員の責任だ。これから対帝具戦は我々が直々に出張るべきだ」

「管制塔を代表し、バルバトスより統括。帝都内における奴隷行為の被害者の誘拐^{保護}行為の完了を確認。未だ我々が認知していない可能性もあり、辺境の地においては情報が集

まりきつてないが、これにて一時終了とする。試作武装は調整後、親衛隊の実行部隊に配給する。捕縛したナイトレイドの処分は現状保留。間違はなく大臣の横槍が入るだろう。これにて、『現世理想／創成国家』の第一段階は終了とする。計画を第二段階に移行する許可を」

「統括局より了承の意を示す。計画を第二段階に移行する」

「観測所、情報室、視覚屋を代表してアモンより報告。エスデス將軍及び副官である三獸士の帰還を確認した。同時に彼らの行動予測結果も算出した。ぜひ、一考を」

【マテリアル】

軍神・兵装舎代表、ハルフアス

外見

クローリン・オルタ

武装：噛み砕く死牙の獣

アカメが斬る！

クリード・コインヘン

こちらの世界の素材とあちらの世界の技術を掛け合わせて造られた、最初の道具。オリジナルと同じ配色なのは、ハルフアスなりのリスペクト。硬度は並みの鎧をはるかに凌ぐが、帝具には及ばない。刃は魔力を回せば再生するが、滅多な事では折れない。エ

クスタスが異常なだけ。この後は人間の親衛隊メンバーに配給する予定。軽い（魔神柱基準）の身体能力強化の術式が施されている。

奥の手は刃を幾重にも枝分かれさせる『抉^ゲり穿^イつ塵殺^ホの槍^ク』。至近距離で繰り出せば文字通り、塵殺できる。

三つ巴の予感

皇帝陛下とオネスト大臣。この二人の組み合わせは、珍しいものではないが、最近は無多にない。理由はひとえに、ゲーティアという謎の存在なのだが、そこは割愛しよう。

「ですので陛下。賊を処刑する段取りは完了しています。後の雑事は私にお任せを」

「おお！そうか！さすがはオネストだ！」

「いえいえ、私など……しかし、陛下。少々、陛下に許可をいただきたい事があります」

「む？なんだ？」

「親衛隊をお借りしたいのです。賊の護送に」

オネストの腹積もりはこうである。今回の賊、ナイトレイドのシエーレの処刑には万全を期したい。そのために親衛隊の護衛を使いたいというのだ。ナイトレイドが襲つてこなければ、親衛隊の評価は大して上がらないし、仮にナイトレイドが襲撃した場合、護衛に失敗すればこれを咎めることができる。最悪なのは親衛隊がナイトレイドを返り討ちにした場合であるが、それでもナイトレイドに被害が発生するため、オネストに

は得がある。

「ぜひ、賊の確実な排除のため、陛下のお力を」

「う、うむ…貸してやりたいのは山々なのだが…あ奴らは休暇に行くらしい」

「……はい？」

「だから、休暇だ。しっかりと休暇届なるものまで残していった」

「このご時勢、休暇届を出す者もいなければ、まともに受理する者もないのだが…」

「…陛下！これは謀反ですぞ！」

「だ、大丈夫だろう。『数日で戻る』と書いていたし…ほら、エスデス將軍も帰ってきたしな！」

「いやいや！陛下！」

数日後、帝国の辺境にて…

「…とまあ、これが帝都の現状です」

「なんとという事だ…地方だけではなく帝都までも…情報感謝致しますぞ、フラウロス殿」

辺境の地には珍しい豪勢な馬車と物々しい護衛の数々。だが、更に異質なのは所々にいる漆黒の鎧を身に纏う人々である。

言うまでもなく、現在休暇中の筈の親衛隊御一行である。

「しかし、まさか陛下直属の護衛とは……このチョウリ。全身全霊で陛下をお支えいたしましよう」

「そう言っていただけだと助かります。何せ、相手はあのオネストですからね」

オネストの独裁を知ったチョウリは、一時は政界から身を引いた我が身を呪い、これから陛下のために全霊で力を貸すと心に誓った。

「そうじゃ、ひと段落したら、娘を嫁にもらつてはくれんかの？」

「ち、父上！なんてことを!？」

「ははは、生憎と私には勿体無いお話。心当たりがあればご紹介しましょう」

「撤退するぞ」

黒服を身に纏い、ただならぬ雰囲気を醸し出す三人。その中で最も年上らしき男は、他の二人にはつきりと宣言した。

「それって、將軍の命令に逆らうのわかってる？」

「勿論。だが、將軍はこう言っておられなかったか？『現場での指揮はリヴァに任せる。判断はお前がしろ』とな」

指揮を任された男、リヴァは屁理屈とも言える意見を出す。同じくエスデス將軍に絶對の忠誠を捧げるニヤウとダイダラはその意見に激しい不快感を示した。

「私の言葉が將軍の言葉に相反する事くらいわかっているさ。だが、我々が將軍に捧げるべきものは、完璧な結果だ」

「？、だからあいつらを殺すんだろ？」

「そうだ。だが、最も忌避すべきものは我々が犬死することだ。將軍にご迷惑をかける事だ」

「…あいつらが俺たちより強いって事か？」

「少なくとも数の利はあちらが上だ。良くて対象テョウワリの暗殺後に殺やられる。最悪は犬死だ」

「じゃあ、やろうぜ」

どこまでも忠実な彼らは、ほんの僅かでも命令を遂行できる可能性があるのならば、

たとえ死ぬことになっても躊躇いなく実行する。

「問題はその後なのだ。我々、三獣士がかつての高官や親衛隊の暗殺を実行したという事実が知れば、エスデス將軍に多大なご迷惑をお掛けする」

今までであれば、たとえ暗殺が失敗したとしても、オネスト大臣の力で全て闇の中に葬り去られただろう。だが、今はオネストに匹敵する権力を持つゲーティアが存在する。

必ず追及されるだろう。仮に、將軍が『三獣士^{部下}が勝手にやったことだ』と言つても、將軍の監督責任を問われるのは必然である。

(思えばエスデス様はこの事態を予感していたのか……)

普段なら命令一つで済ませることを、わざわざ現場の指揮まで頼んだのはこの為か、と自らの心の中で整理をつける。

「撤退だ。責任は私がとる」

「ちえ、しようがないな」

「あゝあ、あいつら殺せば結構な経験値、手に入るんだろーな」

命を捧げる忠誠心を持つ者が恐れるのは、忠誠を捧げる者に失望される事である。

〔前方に確認した敵影が撤退していく。敵影の解析を求む。〕

〔解析結果、第二級警戒対象である『三獣士』と断定。チョウリの暗殺が奴らの目的であると推定。〕

〔今後の行動予測パターン……分析完了。プラン2の可能性が80%以上〕

〔「了解」〕

「フラウロス殿。何か私達に隠していませんか？」

「…何かとは？」

「いえ、なんというか…少し雰囲気が変わったような」

「流石ですね。同胞が少し先に盗賊らしき者共を見つけたものでね」

「またですか!?! 全く、ひどいものですね!」

「ええ、一刻も早くこの国を善きものに」

「くそ!!」

悪態をつきながら普段の倍の食事にかぶりつくオネスト。

ストレスの要因は親衛隊の勝手な行動と最近、再び宮廷に仕えだしたチョウリ元大臣、もといチョウリ内政官の存在である。

付け加えるなら、捕まえたナイトレイドに逃げられたこともストレスの一因である。

「してやられたな」

そんなご機嫌斜めのオネストと話すのはエスデス將軍。こちらはむしろ機嫌が良さげだ。

理由はリヴァ達から聞いた親衛隊の実力の高さだろうか。

ちなみに、親衛隊は独断行動の責を問われたが、チョウリが無事に帝都に到着したため、以降こんなことが無いように、という嚴重注意で済んだ。

「全く！何が親衛隊だ！陛下の命令無視など反逆罪だ！死刑だ！」

「命令が出る前に行動していたから、命令無視ではないだろう?」

それさえも反逆行為なら、陛下の知らぬ所で色々やっているお前も同罪である。

「あいつらのせいで食事が増すばかり! くそ!!」

「最近、拷問官の仕事も減っているそうだな。良識派の者達はこぞつてゲーティアに護衛を頼んでいるぞ」

「ちつ! やはりここは少しばかり尻尾を切る必要がありますな。まずは小癩な賊共から始末しましょう。ゲーティアはその後で…」

「暗殺か? できれば親衛隊と私の軍で一戦交えたいのだが」

「…まあ、前向きに善処しますよ」

〈数日後、ナイトレイドアジト〉

「マインとシエーレの怪我は?」

「順調に快方に向かつてるみたい。でも次の仕事には無理」

「そうか。まあ、全快でも次の仕事までは休養させるつもりだ」

団長、ナジエンダは広間にマインとシエーレ以外のメンバーを集め、次の任務を説明

する。

「ここ最近、あくどい文官が数人ほど暗殺された。護衛含めて死者は30人ほど」

「? いい事じゃないのか?」

「そうだな。現場に『ナイトレイド』を騙る紙がばら撒かれてなかったらな」

「!!!」

「暗殺された文官は全員が中立、といえれば聞こえはいいが、実際はどちらからも、うまい汁を啜ろうとする蝙蝠みたいな連中だ。死んで当然とは言わないがな」

「そして、そいつらの暗殺現場に…」

「これは挑発だ。だが、このまま黙っているわけにもいかない」

「…次の任務は偽物の搜索?」

「いや、奴らが次に狙う目標も見当がつく。近日、良識派の者が二人、宮殿を出る。必ずそこに偽物は現れる」

「さすがボス。やる」

「二人は辺境の村へ。もう一人は竜船に乗るらしい。今回の任務はこの二人の護衛だ」

「統括局より陛下の御命令を伝える。エスデス将軍が作る特殊部隊の人員候補の護衛を

親衛隊^{我々}に命じた。一個中隊ないし大隊での要請だ」

「アモンより推測。間違いなくオネストの介入だ。近日、二人の文官が外出予定だな」

「フォルネウスより予測。三獣士の行動と帝具より竜船での襲撃確率が70%強」

「フラウロスより計算。三獣士の戦闘力からして、通常戦闘員では危険。我々の中から出なければ」

「ハルフアスより賛同。ならば私の出番か」

「バアルより意見。ここは私に任せてもらおう」

「バルバトスより反論。なぜバアルが出る必要があるのか。成功確率が高いハルフアスの方が適しているだろう」

「バアルより立論。最新の魔神柱^{我々}専用武装の試験が可能だ。これを機に専用武装の作成に取り掛かれる。戦力の大幅な増強が見込める」

「統括局より決をとる。賛同の者はその意を示せ」

数日後、竜船乗り場

「すっげー！デカい！」

「おいおい、気をつけろよ」

正装に身を包み、目の前の巨大な船に唾然とするタツミ。そして指名手配されているが、インクルシオの透明化で誰にも注目されないブラート。

「いくぞ…」

コートで顔まですっぽりと覆った三人組が人混みを避けるように蠢く。

「……フン」

その三人を見つめる老人。間に人が入ったとしても見失うことなく三人組を見続ける。

もしもこの世界にある世界の探偵がいたら、全力で船からの転落事故を防ごうとするだろう。

最もこれから起こるのは犯罪紳士に似つかわしくない派手な事件になるだろう。

魔弾と悪鬼

超巨大な遊覧船『竜船』

その大きさは魔神柱のいた世界の豪華客船にひけをとらないものであり、この国の技術力の高さが伺える。だが、その裏には上流階級と庶民の深い確執も存在する。

竜船の甲板では上流階級の人間によってパーティーが開かれている。贅沢なパーティーもまた、この帝国の腐敗を顕著に表していると言えるだろう。

そして、そのパーティー会場に二人、場違いな人間がいる。

ナイトレイドの二人、タツミとブラートである。

「じゃ、俺は船内を見回しておく。タツミは護衛を頼んだぞ」

「おう！任せてくれ、兄貴！」

インクルシオで透明化したブラートと正装に身を包むタツミは別行動をとる。

竜船内部・客室

現在、甲板でパーティが開かれているため、ほとんどの客は甲板に出ている。

そしてそのパーティでは、人々が異常な疲労感に襲われるという異常事態が発生している。

その発生原因が客室の一室にある。

「もういいかな？」

「いや、念には念を入れて、もう少し笛を吹いておけ」

帝具『軍楽夢想スクリーム』。笛の音色によって軍団の士気を上げるだけでなく、効果範囲内の兵士の能力向上もできる。また、反対に効果範囲の人間に様々な状態異常を付加することもできる。

何度も聴くと耐性ができるし、精神が強力な者は耐える事ができるが、生半可な者は耳を塞いでもこの音色からは逃れられない。

現在、ニヤウはこの帝具にて船内にいる乗客と標的らの無力化ないし弱体化を図っている。

同船内部・廊下

今、この場にまともに思考することが可能な者がいたなら、いくつかの事に驚くだろう。

まず、ここにいる老人は船を包む異常に巻き込まれている様子が無いことだ。その足取りは軽く、とても疲弊している様には見えない。

次に、この老人からは何も聞こえないことだ。足音や呼吸音はおろか、身に付けているはずの装飾品や服がこすれる音すらしない。

最後に、この老人が背負う箱である。それは本来、このような場所にはあるはずがない。というか、持ち歩く物ですらない。

異常な老人だが、周囲にそれを不審がる者はいない。

そして老人はある客室で歩みを止め、背負った箱を中腰に構える。

この箱、正確には棺桶の正式名称は超過剰武装多目的棺桶『ライヘンバッハ』。ある主人公とある黒幕犯罪教授の決闘が起こった地の名を冠するものであり、ある英霊の主武装である。

そしてこの老人はその英霊との元共犯者でもある。

瞬間、棺桶の下部から大口径の銃口が出現する。

そして銃弾の嵐が巻き起こる。

「……………」

銃撃が終わる。それでも老人は一切言葉を発さないが、それは何も元来無口というわけではない。

ただ、イラついているだけである。そこにあるべき目標ターゲットの死体が無ければ、奇襲が失敗した事は明白であり……

「危ないな〜」

「まさかこんなにも大胆に攻めてくるとはな…」

自らの命題に辿り着くのがほんの少しとはいえ、遅れることを意味するのだから。

「完全に音を消し、視界も通らなかつたはずだ。なぜわかつた？」

「あんなに殺気ダダ漏れだつたら誰だつて気づくさ」

「全くだ。特に戦場戦場のに身を置く人間相手にはな」

三獣士の二人は扉とは反対の壁に穴を開け、そこから飛び降りて銃撃を回避していた。普通なら運河に落ちるだけだが、この二人の身体能力ならば船の壁にぶら下がることなど容易いことだった。

「…そうか。参考にはしよう。では…」

「死ね」

再び巻き起こる銃弾の嵐。だが、眼前にいるのは歴戦の猛者。

素直に当たるところか、棺桶の下に潜り込み、底を蹴ることで銃口を逸らしていた。

「リヴァ、こいつの相手は僕でいい？」

「ああ、私は甲板にいるダイダラの援護に向かおう。油断するなよ」

「オツケー」

この場から姿を消したリヴァ。対して残ったのはニヤウ。

「…二人でかかってくれば、まだ勝機があったものを」

「冗談。僕たちの本来の目的はお前じゃないんだ」

「そうか、まあいい」

老人は棺桶の持ち手を強く握り、ニヤウは武器を構える。

「我が応報と復讐のために。このバアルによつて死ぬがいい!!」

「うわー…かなりイカレてるね、君」

復讐の業火が幻視されそうな憤怒の眼を持つ者と無邪気の中に残酷な嗜好を潜ませ

た少年。

竜船でのもう一つの戦いが幕を開けた。

「破壊だー！」

棺桶を変形させ、機関銃を撃ちまくる。

「甘んじー！」

だが、ニヤウの圧倒的な速度によって、弾丸は当たらない。

三獣士の中でも、スピードに優れるニヤウ。帝具が支援型でありながら、化け物揃いのエスデス軍の精鋭中の精鋭になったのは、この圧倒的なスピード故だろう。

正史にてタツミに「アカメの方がはやい」と言われていたが、スピードが命ともいえる暗殺者であるアカメと、数多の戦場を生き抜く戦士であるニヤウとでは、さすがにアカメの方に軍配があがるだろう。むしろ、ナイトレイド最速といっても過言ではないアカメが比較対象に挙がるのだから、そのスピードは超人的なものであるとわかる。さらにいえば、その時は手負いの状態である。

そして、バアルの持つ武装はその多機能性ゆえに大型であり、細かな攻撃は難しい。そも、機関銃という命中精度ではなく、弾幕を張ることを主とする武器では、さほど離れていない距離を高速移動するニヤウを打ち抜くのは困難を極める。

「そこっ!」

「ぬうう!」

ニヤウはバアルの僅かな隙について、攻撃を仕掛ける。バアルは棺桶を盾に攻撃を受けとめる。

「……なるほど。ハルファスが油断はするな、といっていた意味がわかった。確かに出し惜しみは不要だ」

ニヤウに聞こえないように小さな声で呟くバアル。

そして、棺桶に魔力を送り込む。

「魔弾装填。いけ」

次の瞬間、棺桶から飛来したものは、銃弾ではなく、ミサイルだった。

そして、それらはまるで生き物のように、障害物を避け、あらゆる方向から目標に向かつていった。

「ちよー嘘でしょ!?!」

この世界において、ミサイルさらには誘導兵器などはオーパーツと同等である。

ある例外を除き、最新兵器が銃や大砲といえ、この世界での誘導兵器の異質さがわ

かるだろう。

普通ならば誘導兵器が命中し、物言わぬ屍と化すだろう。

だが、彼は生半可な戦士ではない。

初見での戦闘など日常茶飯事。さらには、エステスやリヴァ身内の帝具はまさに誘導兵器そのものである。故に…

「よつとー!」

避けるだけなら容易く、そして対処法を編み出すのもそう時間はかからない。

事実、ミサイルはニヤウの変則的な動きと投げつけられた瓦礫によつて対処されている。

「変わった武器持つてるね。帝具かな?」

「……………答える義理はない。さつさと死ね。それが我が望み」

「……………つれないねー」

そう言いつつも、ニヤウは脳内で思考していた。なぜかわからないが目の前の男、バ

アルには余裕がない。正確にいえば『これから大事な用があるのに、貴様なんぞに構っていられるか!』的な焦燥が伝わってくる。罨ではないかと勘ぐるも、彼の瞳に宿る憎悪は本物だ。

そしてニヤウにも言うほど余裕は無い。甲板で戦っているリヴァとダイダラの様子が出来になってしょうがない。水の多い船の甲板ではリヴァが圧倒的に有利だとしても、万が一という事もある。できればいち早く、援護に駆けつけたい。しかし、目の前の敵を見逃すわけにもいかない。

(奥の手使えば、終わるんだけどな)

しかし、帝具の奥の手をここで切つていいものか。決断を迫られる中、バアルが口を開く。

「早く、早く死ね! 死ね死ね死ね死ね!!? 我が憎悪の対象に会うまでには膨大な時間が必要かもしれん! 貴様らの相手をしている時間さえ惜しい!!?」

「……………」

瞬間、ニヤウの表情が消える。逆に瞳には憤怒の火がつく。

バアルは今、『貴様ら』と言った。十中八九それは三獣士のことだろう。

だがニヤウは、『貴様ら』の中にエスデス將軍も入っているのでは?、と感じた。

おそらくそれは違うのだろう。だが、絶対とは言えない。そんなあやふやな動機でも、ニヤウに一つの決断をさせるには十分だった。

「オツケー。じゃあ、死ぬよ!!？」

その憤怒を隠そうともせず、ニヤウは思いつきり、後ろに跳ぶ。

ニヤウは怒っていたが、冷静さを失ってはいなかった。

自らの帝具『軍楽夢想スクリーム』の奥の手『鬼人招来』。本来、自軍にかける強化の演奏を自らにかけらることで、まさに鬼人の如き力を得る奥の手。

だが、演奏という準備時間が必要な為、すぐには発動できない。

しかし、その弱点を鍛錬と持ち前のスピードで最小に抑え、僅か数秒で奥の手発動まで至らしめるのが三獣士『ニヤウ』である。

ほんの僅かな時間に、一切のミスなく演奏を終え、次は逆に思い切り飛びかかる。

当然、バアルも黙ってはいない。ニヤウが後ろに跳んだ瞬間に銃から数多の弾丸とミサイルを発射した。

しかし、ニヤウは身体を捻るなどの最低限の動きと強靱な拳で弾を躲し、弾く。

(獲った！)

そう確信したニヤウ。だが…

「フン!!?」

「なっ!!?」

こともあろうに、バアルは棺桶を離し、付いていた鎖を持って、思い切り殴ってきた。そして、元から爆弾でも付いていたのか、ニヤウにヒットした瞬間、大爆発を起す。

「アアアアアああ!!?」

船室をいくつもぶち破り、何部屋目かの壁で止まる。

現在、ニヤウは『鬼人招来』により、元の細身の少年とは思えないほど、筋肉質な体格に豹変している。

もし、元のまま突っ込めば間違いなく死んでいただろう。

「クソっ！何なんだあの武器！銃なのに殴ってくるなんて…」

余りの異常に思わず悪態をつく。が……

既には詰みチエツクに入った。

「ガツッ?」

飛来する数多の魔弾。最初は頭部に、次は心臓に。魔弾の効果により、機関銃にはあり得ない精度で命中させてくる。初弾で命を奪い、念には念をと言わぬばかりに、身体の各所に弾丸やミサイルが着弾する。

そして、身体のプロトタイプが崩れ始めた頃にようやく、弾丸が止む。

物言わぬ肉塊と化したニヤウを一瞥すると、踵を返してバアルは歩を進める。

「くだらん……」

その時の彼の瞳に宿っていたモノは憎悪ではなく、無。無感情、無機質……まるで機械のように淡々と作業をこなす。

ある存在が関わらなければ、の話だが

竜船・甲板

「うおおおお！」

「凄いだのか!? あの攻撃を！」

ブラートとリヴァとの戦いは苛烈を極めた。リヴァの奥義が炸裂したが、ブラートの気迫が勝り、空中からリヴァを葬らんと槍を振る。

だが、リヴァも歴戦の戦士。いかにブラートの攻撃が超人的でもリヴァもまた超人。躲ききることはできずとも、致命傷は避けられる。

そう、ブラートとリヴァの一对一サシならばそうなるだろう。

「うおおお!!？」

「なににい!?？」

ここにいるのはブライトとタツミとリヴァ三戦士。そして名誉や誇りなど無い、命をかけた闘争。

ならばタツミが、リヴァとブラートの勝負に参戦するのは何もおかしくはない。そし

て当然、闘争の結果も大きく違う。

「これで終わりだああ!!?」

「ブライトオオオ!!?」

タツミの奇襲によってブライトから一瞬、気がそれた。

僅か一瞬。されど一瞬。こと強この戦いにおいてこの一瞬は文字どおり致命的だった。

「…俺の勝ちだ」

「強くなったな、ブライト…」

インクルシオの副武装『ノインテーター』での一撃。それはリヴァを右袈裟から両断した。

とめどなくあふれる血。既に右腕は地面に落ちている。

リヴァにはまだ逆転の手段があった。

自身に毒を注入し、帝具の奥の手『血刀殺』を用いて、相手を毒殺する最終手段。

しかし、毒を自身に注入することはおろか、『血刀殺』の間合いまで踏み込むことすら

不可能。

ならば、自身がやるべきことは……

地面に仰向けに倒れたリヴァ。そして最期の言葉を吐き出す。

「ブラート……そして少年。この船には奴らが……親衛隊が乗り込んでいる……気を付けろ」

「……なぜ俺達にそれを教える」

「ふっ……簡単なことだ。奴らはエスデス様の敵だ。敵の敵は味方……とは言えないが、奴らとお前たちを天秤にかけたまでのこと……」

その言葉に偽りは無い。リヴァは親衛隊とナイトレイドを『エスデスの敵』として天秤にかけ、危険な方を『敵』として。もう一方を『(敵の敵は)味方』と判断したにすぎない。

ただ、そこに過去の戦友だから、という動機があったのかは定かではない。

「あいつらは危険だ。私がここで絶えることが無念で仕方がない。ああ……今だけ、お前らが憎いぞ……ブラート、少年」

「恨まれても仕方がねえよ……それが俺達の使命だ。」

「ククク……そうか。ならば、精々あがけよ……」

リヴァは全てを話し終えたといわんばかりに、目を閉じる。その顔はよく彼を知るブ

ラートには、安らかなものに思えた。

「タツミ、気をつけろよ。まだ戦いは終わってねえ」

「ああ、わかつてるよ兄貴」

リヴァに勝利したブラートとタツミ。だが、リヴァの最期の言葉によって、勝利の余韻に浸ることができなかつた。

ブラートもタツミも、それなりの疲労があり、ブラートに至ってはインクルシオが強制解除されてしまうほどである。

そして未だ姿を見せない敵がこれを見逃すとは到底思えない。

そう、彼はこれを見逃さない。

「一、兄貴、後ろだ！」

「!?、いや！前からもだ!!」

「!?」

少々、不規則な弾道を描いて迫る数発の弾丸。それが背中合わせになっ
ているブラーとタツミ、それぞれの正面から迫る。

当然、二人とも回避する。なぜか、弾速はそれほど速くは無い。挟み撃ちするように弾が迫るのならば、迎撃するよりも避けた方が安全だからだ。

『狩人』はそれをふまえて、弾を動かす。

弾は避けた二人を追うように軌道を変える。

驚愕する二人。だが、これまで不可思議な現象を体験してきた二人は、驚愕するだけだった。

ブラーは回避は無駄と判断してインクルシオの剣で迎撃するが、タツミはもう一度避けてから、迎撃に出た。

全ては計算通り。闘争という数多の乱数が入り乱れる場にて、この狩人は獲物を捉えた。捉えられる様に計算して、誘導した。

ズガン

「ぐあああ?!!」

「あ、兄貴!」

突如、床から現れた亜音速の魔弾は、ブラートの足から膝までを一直線に貫通した。更に大口径の弾な為、ブラートの脚は見るも無残なものとなっていた。

流星のブラートも苦悶の声を漏らして跪く。タツミはブラートのそばに駆け寄る。

ブラートが狙われた理由は至極単純。魔弾の迎撃に立ち止まってしまった事。そしてそれが、タツミよりも早かったからに他ならない。

なまじ、鍛え抜かれた身体能力が仇になったのだ。

「タツミ!来るな!敵はその影だ!」

だが、ブラートもただ、やられたわけではない。自身が傷つく前に僅かに聞こえた銃

声。ソレをしつかりと感知していた。

「——全く、この国の奴らほとんどもないな」

呆れ半分、苛立ち半分といった口調で姿を見せたバアル。既に銃を構え、狙いを定めている。

タツミも剣を構えるが、リーチが違いすぎる。おそらく、タツミが動くと同時に先程の摩訶不思議な弾丸が迫るだろう。

「降伏しろ。貴様らに勝ち目はない。既に三獣士も全員、死んだ」

「……そうか、やはりな」

ブラートは目の前の男の脅威を自分やリヴァと同等かそれ以上と仮定した。

ならば、タツミが勝てる可能性はゼロに等しい。

（タツミ、奴は強い。おそらく今の俺やお前では勝てない）

（兄貴……どうするんだよ）

（—————）

(何を話しているのか、無駄なことを)

バアルはブライトとタツミが何かを話していることはわかったが、あまりにも小さい声なので、聴くことはできなかった。

本気で聴こうとすれば、何かわかるのだろうが、その必要はないと思っていた。

あの時も、我々は何もしなかった。敵は少数、こちらは膨大。ならば力押しこそ最適であったと、我々の誰もが考えた。

敵の数が増えても、我々はそれを上回る数を保有するのだ。敵の要を、あの存在を潰せばよいと、統括局は言った。

だが、殺せなかった。数の暴力では、三千年の熱量では、我々では殺せなかった。

だから、私になった。そして挑んだ。

数でも、熱量でもない。緻密な計算と作戦、そして大胆な発想で挑んだ。

そして成し遂げた……はずだった。

フェニクス、ラウム（あとゼパなんとか）から、奴が生きていると言われた。

何故、という疑問はある。おそらく、共犯者が何かしくじったのか。それとも、私の知らない何かがあったのか。

だが、それがどうした。

死んでいないのなら、また殺しに行くまで。奴の存在を私は許容しない。肯定しない。できるはずもない。

必ず殺しに行く。

だが、この世界を無視することはできない。私ならいざ知らず、我々となった今、コレを野放しになどできなかつた。

だから、早々に終わらせる。

腐った者も、馬鹿な者も、邪魔な者も、一切合切終わらせる。

効率よく、躊躇無く、慈悲無く。

一秒でも早く、あの存在をコロスために。

このような存在に構っている時間すら惜しい。

だが、先のような失敗はしない。敵の情報を収集し、理解し、計算する。

そして、敵の戦力を削ぎ落とした上で、正面からねじ伏せる。

それが、最も効率的だと確信している。

「兄貴！無茶だよ！やめよう！」

「ふざけんじゃねえ!!ここでこのままやられてたまるか！」

突如、言い争いを始めた二人。そして、そのままブライトがタツミを殴り飛ばした。

「待たせたな。さあ、来いよ！」

「…いいのかね。今の貴様では私に勝てまい」

「ああ…そうかもな…」

「俺ならな」

「インクルシオオオオ!!!」

「何!?!」

よく観察すれば、ブラートの手に帝具『インクルシオ』は無い。先程殴り飛ばしたタツミが鍵となる剣を持っている。

「くっ、魔弾発射!」

銃から最高速の魔弾を発射する。だが…

「ハアア!!」

インクルシオの防御力に任せたパンチによって、魔弾は迎撃される。

「兄貴!行くぜ!」

「おう!大丈夫だ、頼んだぜ!」

インクルシオを纏ったタツミがバアルに突進する。それをバアルは棺桶による打撃で迎撃を試みる。

「でりゃああ!!?」

「なに!?!」

が、棺桶の間合いギリギリでタツミは急ブレーキをかける。

思い切り甲板を蹴り飛ばして急ブレーキをかけたことで、破壊された木片や粉塵が舞う。

バアルの誘導魔弾は、魔弾による自動追尾ではなく、バアル本人の目視による任意誘導となっている。『魔弾の射手』という幻霊が存在せず、さらに急ぎの作成と相成ったため、超高性能誘導にはバアル本人の感知能力が必要となったのだ。

しかし、おかげでブラートの真下の甲板まで弾丸を誘導して狙撃する、という離れ業を実現できたのだ。

そして、今、もうもうと舞う粉塵によってバアルの視界は一時的に潰された。それは魔弾の使用不可も意味する。

「おのれ！こんなもので私が止まるものか！」

すぐさま、感知能力を視覚に頼らないものに切り替える。

が、遅かった。

「うおおお！」

そこには船から飛び降りるタツミと、タツミに抱えられたブラートがいた。インクルシオによって身体能力が引き上げられたタツミは、船の側面でスピードを殺しながら着

水する。

「逃げられたか……」

その声には不思議と怒りの感情はない。だが、無感情というわけでもない。相当するのは危機感、或いは警戒か。

「まさか、私が敗けるとはな。やはり、この存在はわからんものだ」

一言二言、眩くとバアルは踵を返す。そろそろニャウのスクリームの効果が切れ、乗客が目覚ますころだ。

念のために三獣士の死体を確認する。すると、リヴァの手の指にあるはずの帝具『水龍憑依ブラックマリリン』が無くなっていた。

「あの男か……さすがに抜け目無いな。まあ、誤差の範囲内だな」

ダイダラの近くに落ちていた帝具『二挺大斧ベルヴァーク』を担ぎながら、静かにバアルは呟いた。

〈マテリアル〉

平凡への復讐者^{アヴェンジャー}

バアル

カルデアのマスター・藤丸立香に対して並々ならぬ憎悪を持っている。詳しくは新宿をクリアすべし。FGO世界に戻りたい派筆頭だが、この国の事も放っておけないので、任務は最効率になるように終わらせる。

性格は、『アマデウスがいない時のサリエリ』に近い。ただし、こちらは他の事に関しては無感情である。

《武装》

超過剰武装多目的棺桶『ライヘンバツハ』

モリアーティのあの棺桶。ただし、魔弾の射手を取り込めて無いので、魔弾はバアルの視覚や感知によるマニユアル(?)ホーミング。

弾は魔力で作られるため、膨大な魔力を持つ魔神柱専用の武装。

まだまだ改良の余地があり、更なる強化が期待されている。

変わりゆく世界線

ナイトレイドのアジトでは、鎧を纏った少年と大剣を振るう女性が、凄まじい攻防を繰り広げていた。

「ふっ！」

「はあー！」

不思議なことに、少年は鎧を纏っているにも関わらず、少女の大剣を真正面から受け止めようとせず、少々、過剰気味に回避している。対する少女も矢継ぎ早に繰り出される少年の攻撃を回避し続ける。その手に持つ大剣で受け止めることはしない。

「そこまで！3分経過！」

そう宣言したのは先程からこの二人の戦いを見ていた少女、アカメであった。

アカメの言葉で模擬戦をやめた二人、タツミとシエーレはすぐさま地面に座り込む。

「ゼエ、ゼエ……やっぱ3分でもきついな」

「ハア、ハア……私もまだまだ修行不足ですね」

僅か3分の全力戦闘。しかし、二人はそれぞれ今までとは大きく異なる戦い方を見出

しつつかあった。

シエーレは武器による防御ではなく身体能力による回避を重要視するようになり、タツミはブラートから受け継いだインクルシオを体に馴染ませつつ、その防御力に依存しない戦い方を編み出そうとしていた。

二人をここまで駆り立てるものといったら、昨今の敗北以外ありえないだろう。

二人とも奇跡的な生還を果たしたが、これから先、再びあの二人と戦う可能性は高い。

ハルファスとハバル

そのときに勝つために、仲間を守るために、今まで以上の鍛錬と新たな能力の開発に勤しんでいた。

一方、未だ親衛隊と対峙していないナイトレイドの面々も、必死な二人を見て自らもと鍛錬量を増やしていた。

「おっ、どうだ？タツミ！進捗は」

「兄貴！だんだん慣れてきたところだ」

義足に特徴的な髪型をした男、ブラートがタツミと話し始める。

先日、竜船の事件の際には右脚を撃ち抜かれ重症を負ったが、辛くも逃亡し、持ち前の生命力で何とかここまで回復したのだ。しかし、さすがに右脚は使い物にならなく

なってしまう、それに伴ってインクルシオもタツミへ譲渡した。

「さて、これからのことを話しておこう」

ナイトレイドのリーダー、ナジエンダが話を切り出し、メンバーは鍛錬を中止して話を聞く。

「まず、私とブラートは革命軍本部に戻る。ブラートはそこで義足の取替えとリハビリをするから、当分はここへ来れない。私はブラートの代わりと戦力増強のための新メンバーを連れて戻ってくる」

新メンバーという単語に反応しつつも、ブラートの離脱を悲しむ一同。

「心配するなって。回復したらすぐ戻るぜ！」

「そうだな、私のいない間の指揮はアカメ、任せた。いつも通りでな」

「わかった」

「いまのでわかったの!？」

「そうだ、タツミ。ちよつとがんばりすぎだぜ。ちゃんと休めよ」

「でもよ兄貴、俺は…」

「…オラ！」

「イテエ！」

ブラートのデコピンがタツミの額にクリーンヒットする。

「どうせ、俺が怪我したのは自分のせいとか考えてるんだろ。違うぜ、タツミ。怪我は俺自身の責任だ。お前は気にすんな…って言っても無理なんだろうな」

「……………」

「んじゃ、漢の約束だタツミ。俺が戻ってきた時、元気なお前の姿を見せてくれよ」
「兄貴…ああ！約束だ！」

約束した方がいいが、何となくブラートの言葉がやばく思えたタツミなのだった。

以下、とある激動の数日をダイジェストでお送りしよう。

「イエーガース、発足だ」

そう言う女性の笑みには底知れない狂気がある。女性の名はエスデス。ドSという言葉すら生易しい帝国随一の狂戦士である。

その彼女が率いる全員が帝具使いという最強の部隊こそが、『イエーガース』である。

「今から……私のものにしてやろう……」

「……えええ!!」

エスデス主催の武芸大会にてタツミ、エスデスから突然の告白(?)

その夜

「zzzz……」

(誰か助けて……)

誰だお前、といわんばかりのキャラ変したエスデスに抱き枕にされているタツミ。当然、その夜は一睡もできなかつた。

「先生やあの方たちからいただいた新しい力！」

「ふふふ…気に入ったらお人形にしてあげる…」

「スタイリッシュ、セリューのあの武器はなんだ？」

「最高にスタイリッシュ!!でしよう!!!過去最高の作品です!!!」

とある存在によって大きく変貌したのは、正義に狂う少女と、ある変態科学者のテンシヨンの様だ。

「…以上で、イエーガース発足以降の大まかな活動報告は終了だ」

「「……ハアアアア……」」

口がなく、息をする必要すらない魔神柱がなぜかため息である。

「いやほんと、あの女は何なのだ。我らの予測外の事例が多すぎる」

「バアルより予測。例の少年がトリガーと考えられる」

「アスモデウスより推論。エスデスはかの少年を支配することで、性的欲求を満たそうとしているのではないか？」

「ベレトより反論。あの者曰く、あれこそが恋、恋慕と呼ばれるものらしい」

「ハルファスより同意。コノートの女王、メイヴのようなものか」

「グレモリーより疑問。エスデスには異性関係が皆無のはず。マシユ・キリエライトの方が適切な比較対象では？」

「フラウロスより弾劾。グレモリーの意見は棄却すべきだ」

「アンドロマリウスより肯定。異性経験皆無で高圧的ならばジャンヌ・ダルク・オルタが適切だと思われる」

「ゼパルより主張。メルトリリスの方が適切だと……そんなことよりエスデスと少年の夜のあれこれについて詳しく」

「こいつ！性懲りもなく！」

「いい加減直れこのゼパなんとか！」

「フフフ、ソワカソワカ……」

「話を戻そう。で、現状のイエーガスは？」

「件の少年、タツミとイエーガースの一員、ウェイブはフェイクマウンテンへ行く最中、はぐれたらしい。おそらくタツミはナイトレイドのアジトへ帰還した模様」

「アロケルより報告。我が共謀者が感付いた。おそらく私設部隊を出すだろう。独断で

あるため、勝率は7割強である」

「カイクより予測。持ち出した帝具と私設部隊の能力を持つてすれば、十分な勝率である」

「ブネより異論。9割未満の確率に賭けるのは許容できない。更に、敗北時の損害を考慮すれば、何らかの対策は講じて然るべきだ」

「戦線に直接介入せずに援護可能なバアルを投入するのはどうだ？」

「採用しよう。バアルは準備を済ませ、D r. スタイリツシユとその部隊に合流し、戦線に参加せず援護せよ」

「バアルより了解」

「アロケルより追加。我らが共同作品の指揮権を一時、譲渡しよう。万が一の時に利用してくれ」